

他人の非を説くべからず

同情

③ 他人の非に手かくべからず、惡む心にて他の非を見るべからず、佗の非と我が是を見ざれ、自然に上敬し、下恭するの昔の語あり。
【正法眼藏】

④ 佛の言く、人の道を施すを觀て、之を助て歡喜するに、福を得ると甚だ大なり、沙門問て曰く、此福盡くか、佛言く、譬へば一炬の火ある、數千百人各々炬を以て來り、分ち取て食を熱し、冥を除くに、此炬故の如くなるが如く、福も亦之の如し。
【四十二章經】

一視同仁と佛子

⑤ 生佛異見を生じ、自他憎愛を作して、取捨するは佛弟子の用心にあらず、差別の棟擇心なく、平等の慈悲心あるを眞の佛子と云ふ。
【供養參】

同情と無畏

⑥ 無異施とは、人間或は畜類虫類までも恐れをのゝくや

施せ

同情と不殺生

うに、辭にてもあれ、又は振舞もせざるを、無異施とは申すなり。
【霧海指南】

其二

⑦ 早く惡をば止むものを知るべし、神も佛も生てこそ世を教へたまへり、まして其外のもの死を願ふとあらじ、生ずるもの、ならひ、必ずしかく昔より今に至るまで、心ある人は死ぬ物の命を救ふを善しとして放生をつとむ、古へ雀の鷹に逢ふて、傷を蒙るを助け、子孫四代まで高位に昇る、又龜の子供にとられ、殺されるを見て、唯だ三百文ある錢にて買取り、命を助けたる故、程なく地行の主となる、これ殺せば咎にあひ、救へば幸を得る、因果歴然、少しも違ふべからず。

⑧ 物の命を取るべからず、物を殺すは我身を殺すなり、故

に惡をば止めて、天道の本を守るべし、物を救へば我身を助かる故に、方めて物の命を救ふべし、これ天道に叶ふが故に、天道のあはれみを得て、今生無事無難にして後世もやすし。
【大智法語】

第十六項 同化

同化其一

一路に劍客に逢へば須らく劍を呈すべし、これ詩人ならずんば、詩を献ずると莫れ。
【槐安國語】

其二

詩は會人に向て吟し、酒は知己に逢て飲む。
【槐安國語】

其三

木の下を栖家とすれば自ら花見の人となりけるかな。
【大道假名法語】

布施と同化

布施と云ふは、自性の靈光萬機を照し、應用普く施し、彼にありては彼に同じく、是にありては是に同じくして、

餘るとなく、缺くるとなき是なり。
【披隊假名法語】

第十七項 博愛

布施と三昧

若し諸の比丘衣鉢の餘をば分寸も蓄へず、乞食の餘分をば餓たる衆生に施し、大集會に於ては合掌して衆を禮し、人あり打ち罵れども、稱讚に同くして必ず身心をして、二つ共に損捨し、身肉骨血衆生と共にらしめよ、如來不了義の説を將て、己が解と爲して、以て初學を誤らしめざれ、佛是の人を印するに眞の三昧を得と。
【首楞嚴經】

博愛其一

夫れ以れば、眞淨界中には自なく他なし、豈に其間に怨親を容れんや、一迷纒かに生ずれば、萬境隨て現ず、世界の治亂、人倫の怨親、虚妄にして相酬い、虚妄にして相奪

ふ若し靈根ある者は直下に非を知て一念生せず。

【夢窓語錄】

其二

③ 夫れ佛の道たる人の親を視ると猶ほ己が親の如し、物の生を衛ると猶ほ己が生の如し、故に其善を爲す時は、則ち昆蟲悉く懐く。

【輔教編】

其三

④ 夫れ衆人の心を以て心と爲す時は、我好悪は乃ち衆人の好悪なり、故に好も邪ならず、悪も謬らず、又安ぞ私に腹心に託して、其諂媚に甘服するを用人や、既に衆人の耳目を用て耳目と爲す時は、衆人の聰明は皆我聰明なり、故に明鑒みすと云ふとなく、聰聞かすと云ふとなし、又安ぞ私に耳目に託して固に其弊惑を招くを用ゐんや。

【章江集】

利他と佛道

⑤ 淨明經に曰く、若自ら縛ありて、能く彼が縛を解と云は此處あると無しと、是故に一切衆生を度せんが爲の故に、切に一切智を求む、一切智を求めんが爲に先須く見性すべし、是自身成佛して、衆生を度するにあらず、衆生を度せんが爲に自ら成佛を求む、亦復是自の成佛の爲に衆生を度するにあらず、衆生の爲の故に普く佛道を行ず、是故に學者先須く己を捨つべし、自利に著すると莫れ。

【宗門無盡燈論】

慈悲の如來

⑥ 若衆生をして歡喜を生せしむる者は、則ち一切如來をして歡喜せしむるなり、何を以ての故に、諸佛如來は大悲心を以て而も體と爲し、玉ふが故に、衆生に因て大悲を起し、大悲に因て菩提心を生じ、菩提心に因て等正覺

慈悲は天地の如し

慈悲の十四功德

を成じ玉ふ。

⑦ 譬ば曠野沙磧の中に大樹王あらんに、若根水を得れば、枝葉花果悉く皆繁茂するが如し、生死曠野の菩提樹王も亦復是の如し、一切衆生を樹の根と爲し、諸佛菩薩を華果と爲し、大悲の水を以て衆生を饒益する時は、能く諸佛菩薩の智慧の華果を成就す、是故に大悲は地の如し、悉く一切の法門を生ずるが故に。

⑧ 大悲は能く佛性を見る、他の爲に先眞智を明むるが故に、大悲は能く牢關を透る、他の爲に益々深法を究むるが故に、大悲は能く向上に徹す、他の爲に別に生涯を求むるが故に、大悲は能く力用を成す、他の爲に勉て此道

大悲の徳

⑨ 凡そ大悲の徳は廣大無盡にして、多劫に演説すとも、終

入る、他の爲に至らざる所なきが故に、大悲は能く法界に

離る、他の爲に皆實義に本くが故に、大悲は能く名利を

他の爲に饒益の心を行ずるが故に、大悲は能く憍慢を除く、

他の爲に身命財を捨るが故に、大悲は能く煩惱を滅す、

の爲に常に方便を起すが故に、大悲は能く福徳を成す、他

の爲に念々失せざるが故に、大悲は能く威儀を成す、他

爲に深く物理を推すが故に、大悲は能く多聞を成す、他

普く一切を究むるが故に、大悲は能く多聞を成す、他

此心決定するが故に、大悲は能く廣學を成す、他の爲に

憤志を生ずるが故に、大悲は能く不退に至る、他の爲に

を行ずるが故に、大悲は能く勇猛を起す、他の爲に常に

衆生を赤子とす

慈悲の心と
佛
布施と不諂

に極あると無し、要を以て之を言はば、大悲願力ある者は、能く一切の業障を消滅し、普く能く一切の功德を圓滿す、理として明めざる無く、道として行せざる無く、智として到らざる無く、徳として成らざる無し。

◎ 譬ば人の心を得んと欲する者は、先づ其子を愛するが如し、諸佛菩薩は普く衆生を以て子と爲し玉ふが故に、是故に平等に衆生を愛する時は、則ち一切諸佛感應せざる無し。

【華嚴經】

◎ 慈悲に物事やわらかなれば、心明らかなり、心明らかなれば佛現はるゝなり。

【無難假名法語】

◎ 布施と云ふは不貪なり、不貪と云ふは、むさぼらざるなり、むさぼらずと云ふは世の中に云ふ不諂曲なり、たと

慈悲

慈悲の殺生

ひ四海を統領すれども、正道の教化を施すには、必ず不貪なるのみなり。

◎ 向ひて愛語を聞くは、面を喜ばしめ、意を楽しくす、向はずして愛語を聞くは、肝に銘じ、魂に銘ず、知るべし、愛語は愛心より發る、愛心は慈心を種子とせり、愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。

【正法眼藏】

◎ 菩薩に慈悲の殺生と云ふとあり、一國一家に大惡人ありて、多くの人を迷惑さする時は、此惡人を殺しても苦しからずと佛も許し玉ふ、惡人惡殺生を殺す時に、殺す人瞋恚の心一念なりともあつて殺せば、皆罪業となるべし、殺しながらも慈悲の心を以て殺す時は罪業あるべからず、惡人惡畜生は殺すと雖も、自業自滅の理なり。

布施其_一

⑤ 各々富貴で持つ寶。あればある程足らぬもの。多く

の寶ゆづるとも。持つ子が持たねば持たぬもの。少

しも田畑ゆづらねど。持つ子はあつぱれ持つものぞ。

⑥ 我子の繁昌祈るなら。人を倒さず施行せよ。

飢死ぬ人を助けなば。此に勝れる善事なし。たとひ

萬貫長者でも。死で身につく物はなし。妻も子供も

⑦ 貧者に施せぬ人は。富貴で暮す甲斐もなし。狗でも

口はすぐるぞや。飢人貧者を助くべし。慈悲善根は

そのまゝに。家繁昌の御祈禱ぞ。慈悲善根をする人

は。神や佛に守られて。天魔外道はよりつかず。

其_二

其_三

愛語

効果なき慈

公益

【施行歌】

⑧ 徳あるはほむべし、徳なきは憐むべし、愛語を好むより

漸く愛語を増長するなり。【正法眼藏】

⑨ 總じて慈悲の心より三つの施を行すべし、慳貪の心高

慢の心、名利を求むる心にて布施すれば功德なし。【霧海指南】

第十八項 公益

① 洞山大師、南源の道明禪師を辭し去らんとす、時に源云

く多く佛法を學んで廣く利益をなせと、洞山の曰く、多

く佛法を學ぶとは即ち問はじ、如何にせば廣く利益を

なさん、源曰く、一物にも違ふとならんは、即ち是と。【曹洞二師錄】

治生産業
布施其一
其二

利行

① 治生産業固より布施にあらざるとなし。【正法眼藏】

② 舟を置き橋を渡すも布施の擅度なり。

③ 昔母子三人あり、常に三事を作せり、一には大船を作りて河中に置き、以て諸人を渡し、二には都市に於て好井を造りて、以て萬人に供し、三には街衢に於て團扇を造りて、自然に福を得たり。

④ 愚人思はくは、利他を先とせば、自が利省かれぬべしと、然にはあらざるなり、利行は一法なり、普ねく自他を利するなり、昔人、一たび沐浴するに三たび髪を結び、一たび餐食するに三たび吐出せしは、一向に他を利せん意なり、他人の國の民なれば、教へざらんとにはあらざる

【譬喻經】

なり。

第十九項 平和

【正法眼藏】

平和其一
病は善智識
なり

① 熱々世間を觀するに、病に害せらるゝより、妄念に殺さるゝ者多し、妄念は毒蛇よりも怖るべし、妄念を離るゝ時は、病は實に是善知識なり、古より重病苦痛と戰ひて、得力見性の人数多なり、若し重き病を受くる時は、死を畏れず、生を顧みず、忍辱の鏡をかけ、忠義の弓矢をたばさみ、勇猛の馬に跨り、精進の鞭を握り、唯一乗の旆を押し立て、少欲無我が兵卒とし、譜代の正念工夫を大將とし、氣海丹田の心王城を堅め、五形鍊丹の兵糧を貯へ、無念無想の計略を廻らさば、四百四陣の病將一時に蜂起し、八萬四千の魔軍を後詰とし、八識七情より攻め入る

太平

とも、少しも惶れず、終には心王の仁慈に歸し、大將の威勢に伏し、兵卒の勇氣に畏れ、戈を倒し、膝を屈して降参せんとき、十方に敵なく、全體に苦なく、正邪一如、四海太平を歌ひ、二世安樂を得べし。
 【毛庵假名法語】

③ 萬里煙塵一點もなし。太平の時節歡娛すべし。當年馬上三千の卒。兵書を讀まずして魯書を讀む。
 【江湖風月集】

平和其二

③ 君と成りては即ち四海を保ち、臣と成りては即ち忠にして、仁を以て民を養ふ、父は明かにして、子は孝慈なり、夫は信にして、婦は貞なり、優婆塞優婆夷是の如く執行せば、世に佛に逢ひ、法を見て佛道を得ん。
 【孝子經】

④ 國家に眞實の佛法弘通すれば、諸佛諸天ひまなく衛護

佛法と平和

平和其三

するが故に、王化太平なり、聖化太平なれば、佛法其力を得る者なり。
 【正法眼藏】

⑤ 聖主は常に心を下に専らにす、暗君庸主は常に心を上に恣にす、上に恣にする時は、九卿權に誇り、百僚寵を恃で、曾て民間の窮困を顧るとなし、野に菜色多し、國に餓莩多く、賢良潜に竄れ、臣民瞋り恨み、諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起りて終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絶するに至る、心を下に専らにする時は、九卿儉を守り、百僚約を勤む、常に民間の勞疲を忘るゝとなく、豊かに餘粟あり、婦に餘布ありて、群賢來り屬し、諸侯恐れ服し、民胞へ國に刀斗の聲を聞くことなく、民に才戟の名を知らず、人

身も亦然り、主人は常に心氣をして下に充たしむ、心氣下に充つる時は、七凶内に動くことなく、四邪も亦外より窺ふとなし、營衛充ち、心神健なり。

【壁生草】

第五節 三寶に對する道德

第一項 序

○佛法僧の時節に遭ながら、佛法僧の怨敵となりぬ、三寶の山に登りながら、空手にして還郷り、三寶の海に入りながら、空手にして還郷らんとは、たとひ千佛萬祖の出世に遭とも、得度の期なく、發心の方を失するなり、これ經卷に從はず、知識に從はざるによりて斯の如し。

○深く佛法僧の三寶を崇ひ奉るべし、生を變へ身を變へても、三寶を供養し、崇ひ奉らんとを願ふべし、ねても覺

三寶に從はざるの失敗

三歸依の態度

ても、三寶の功德を思ひ奉るべし、ねても覺ても、三寶を唱へ奉るべし、たとひ此生を捨て、未だ後の生に生れざらん其間、中有と云ふとあり、其壽命七日なる、其間も常に懇ろに聲もやまず、三寶を唱へ奉らんと思ふべし、七日を経ぬれば、中有にて死して、また中有の身を受けて、七日あり、如何に久しと雖も、七日をば過ぎず、この時何事を見、さくも、さわりなきと天眼の如し、斯からん時、心をばげまして、三寶を唱へ奉り、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱へ奉らんとを忘れず、間斷なく唱へ奉るべし、已に中有を過て父母の邊に近づかん時も、相かまひて正智ありて、託胎せん處、胎藏にありても、三寶を唱へ奉るべし、生れおらん時も、唱へ奉らんと怠らざら

三歸依の感應

三歸と佛弟子

三寶の功德

③ 明らかに知りぬ、西天東土、佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり、歸依せざれば恭敬せず、恭敬せざれば歸依すべからず、この歸依佛法僧の功德必ず感應道交する時成就するなり、たとひ天上人間、地獄鬼畜なりと雖も、感應道交すれば必ず歸依し奉るなり、已に歸依し奉るが如きは、生々世々在々處處々に増長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。

④ 凡そ歸依三寶の功德許り量るべきにあらず、無量無邊なり。

⑤ 佛弟子となるに必ず三歸による、何れの戒を受くるも、必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり。

三歸の効果

三寶と佛子の修業

三寶供養法

三寶と出苦

⑥ 世間の苦厄速に離れて、無上菩提を證得せしむるに必ず歸依三寶の力なるべし、凡そ三歸の力三惡道を離るゝのみにあらず、天帝釋の身に還入す。

⑦ 凡そ佛子行道必ず先づ十方の三寶を敬禮し奉り、十方の三寶を勸請し奉りて、其御前に焼香散華して、まさに諸行を修するなり。

⑧ 佛法僧を供養し奉らんとするには、諸の香をとり來りて、先づ躬ら兩手を洗ひ、漱口洗面して、淨衣を著し、而して後に佛法僧の境界には供養し奉るなり。

⑨ 九幽の劇苦を出でんと要せば、須らく三寶の洪慈を憑むべし。

【正法眼藏】

【鼓山晚錄】

三寶は一體なり

◎三寶を禮拜せば、常に唯だこれ一なりと念言せよ、何者覺法満足するを佛と名け、所覺の道を法と名け、佛道を學する者を僧と名く、則ち知んぬ、一切の凡聖は、體同じくして二なきとを。

【細門寶鏡】

三寶と自己

◎借る者は必ず還す四大の身。暫時の光影竟に眞に非ず。若能く念々に三寶を念せば。寶々長く屋裏の珍と成らん。

【名山廣錄】

三歸と解脱

◎三歸依の故に則ち安樂を得、安樂を受くるは即ち眞の解脱なり、眞の解脱は即ちこれ如來なり、如來は即ちこれ涅槃なり、涅槃は即ちこれ無盡なり、無盡は即ちこれ佛性なり、佛性は即ちこれ決定なり、決定は即ちこれ阿耨多羅三藐三菩提なり。

【涅槃經】

三歸と成佛

◎我身をも忘れて、一たび三寶の願海に入て後は、佛祖及善知識の教に違はねば、身も心も共に佛にて候。

【十二時法語】

第二項 佛寶

◎はげみて南無歸依佛と唱へ奉るべし、此時十方の諸佛憐みを垂れさせ給ふ縁ありて、惡趣に赴くべき罪も轉じて、天上に生れ、佛前に生れて佛を拜み奉り佛の説せ玉ふ教法を聞くなり。

其二

◎供佛の功德によりて作佛あるなり、未だ嘗て一佛をも供養し奉らざる衆生、何によりてか作佛するとあらん。◎佛を供養し奉らんとするに、其身貧しと云ふと莫れ、其家貧しと云ふと莫れ、自ら身をうりて諸佛を供養し奉

供養と貧賤

供養の効果
其三

るは、今大師釋尊の正法なり、誰か之を歡喜し奉まつらざらん。
【正法眼藏】
四 佛を供養する者は、大福徳を得て、速に阿耨菩提を成じて、諸の衆生をして、皆安樂を獲せしむ。
【不思議境界經】

經卷と如來

第三項 法寶

經と修行の標準
法は最も勝る

一 經卷は如來全身なり、經卷を禮拜するは、如來を禮拜し奉るなり、經卷にあひ奉れるは、如來に見え奉るなり、經卷は如來全身なり。
二 佛道に定て佛經あることを知り、廣大の深義を山海に參學して、辨道の標準とすべし。
【正法眼藏】
三 我れ初め道を成じて、誰か敬ふべく讚むべきかを觀る

不惜身命

に法に過ぎたるはなし、法は能く一切の凡聖を成立す。
【般若經】

其二

四 飽迄如來の正法をきかん、道にいかでか此卑賤の身命を惜む心あらん、惜みて後何者の爲にか捨てんとする。
五 たとひ卑賤なりと云ふとも、爲道爲法のところに惜ま

其三

六 今正法に遭ふ、百千恒沙の身命を捨て、も、正法を參學すべし。
【正法眼藏】

供養の効果

七 法を供養する者は、智慧を増長し、證法自在にして、能く諸法の實性を了知す。
【不思議境界經】

出家と累徳

第四項 僧寶
一 今吾等宿善根力にひかれて、最勝の身を得たり、歡喜隨

其二

喜して出家受戒すべし、最勝の善身を徒にして、露命を無常の風に任するとなかれ、出家の生々をかさねば、積功累徳ならん。
【正法眼藏】

祖恩其一

② 僧を供養する者は、無量の福德資糧を増長して、佛道を成ずるを致す。
【不思議境界經】

其二

③ 祖師傳法の深恩懇ろに報謝すべし、畜類尙恩を報ず、人類いかでか恩を知らざらん、若し恩を知らずば畜類よりも愚かなるべし。
④ 世恩尙忘れず、重くする人多し、之を人と云ふ、祖師の大恩は父母にも勝るべし、祖師の慈愛は親子にもたくらべされ。

其三

⑤ 今の見佛聞法は、佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、

其四

佛祖若し單傳せずば、如何にしてか今日に至らん、一句の恩尙報謝すべし、一法の恩尙報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩之を報謝せざらんや、一日に無量恒河沙の身命捨てんこと願ふべし。

⑥ 祖の恩必ず報謝すべし、其報謝は餘外の法は當るべからず、身命も不足なるべし、國城も重きに非ず、國城は他人に奪はる、親子にも譲る、身命は無常に任す、主君にも任す、邪道にも任す、然ればこれを擧して報謝に擬するに不道なるべし、たゞ正に日々に行持その報謝の正道なるべし。
【正法眼藏】

第四章 三寶の意義

三寶とは何ぞ

三寶三種の功德

一體三寶

① 釋教の寶とする所の者三曰く佛なり曰く法なり曰く僧なり、これを三寶なりと爲して、世の明月、夜光は與か
らざるなり、三寶また機に隨て分ち、根を逐て異なる所
謂大乘の三寶あり、小乗の三寶あり、同體の三寶あり、別
體の三寶あり、住持の三寶あり。
【獨卷護法集】

② 三寶に三種の功德まし、之を知れば愈々廣大甚深
なり、三種とは、一には一體の三寶なり、二には現前の三
寶なり、三には住持の三寶なり。

③ 初の一體三寶を同體三寶とも云ふなり、夫れ生佛共に
妙不思議の法性の上に靈覺の徳具はりて、光明照了し
て不味なれば、一切の煩惱惡業を皆解脱す、共に此を一
體の佛寶と稱す、其法性は寂滅なれども、無邊恒沙の功

現前三寶

徳機感に隨て應現すれば、一切衆生の出離得脱の儀則
となる、故に一體の法寶と稱す、其光明と寂滅とは一異
にあらず、事理不二、性相相和合するを一體の僧寶と稱
す、此三寶が只一體にて、一體の徳を三に分て三寶と稱
する故に、一體の三寶と云ふなり。

④ 次に現前三寶とは、又別體の三寶とも、別相の三寶とも
稱す、釋迦如來初て菩提樹下に成道しましたして、利益
衆生の爲に大身小身機に應じて現じ玉ふを現前の佛
寶と稱す、其所説の四十九年の經律論大藏、小藏を現前
の法寶と稱す、其説法を聞て得道あられたる舍利弗、目
連、阿難、迦葉等の百千萬の三乗の弟子を現前の僧寶と
稱するなり。

住持三寶

⑤次に住持の三寶とは、佛在世より、彌勒の出世まで斷絶せぬやうに三寶を住世護持せしむるを住持と稱す、住持の佛寶とは、泥龕塑像とて、土佛木佛彫造し、亦是畫圖に彩飾して、永く保ちて失却せぬを云ふ、住持の法寶とは、黄卷赤軸とて、今世に流布する五千餘卷の大藏經を稱す、住持の僧寶とは、即今剃髮染衣し、佛法を修行し、師より弟子に幾百千年も傳授して不斷なるを稱するなり。

三寶の六義

⑥佛法僧の三寶をさへ頼めば、人間天上の樂をも得るに自由なり、地獄餓鬼の苦を除くとも自在なり、如何にならぬとも、三寶の徳を頼で成就せざるとなし、故に三寶を世間の財寶に比して六種の深淺を古徳示されたり。

一難得

⑦一に世間に難得相似とは、金銀財寶をば、世間の貧人は一生の中にも得ざるが如く、此佛法僧の三寶は、過去の善根なき衆生は、百千萬劫にも値ひ奉つるとならぬなり。

二無垢

⑧二に垢なきと相似たりとは、世間の金銀は、石砂の垢を離れて寶となりたるが如く、三寶は三界一切の煩惱妄想の汚を離れたる故に、衆生の寶なるなり。

三威徳

⑨三に威徳相似たりとは、國王將軍の威徳ありて、人が恐れ亦ば人が懐くは、財寶を多く貯へたる故なり、是の如く三寶に歸依すれば、一切の魔類が恐れ、一切の賢聖の守護あるは、三寶に不思議の威徳の具はりたる故なり。

四莊嚴

⑩四に莊嚴相似とは、世間の人は、財寶だにあれば、衣食住

五勝妙

所に付て美麗を飾るも心の儘なるが如く、三寶の功德だにあれば、梵天帝釋の福をも得、或は五十位の菩薩七寶莊嚴の境界をも得らるゝなり。

② 五に勝妙相似とは、世間の中にて、金銀に越て貴きものなきやうに、三界の中には三寶に超て最勝なるものはなきなり。

六不改異

③ 六に改異すべからざると相似たりと云ふは、世間の金銀の焼けども、灰にならず、埋めども土とならず、金銀の體少しも變せざるが如く、此三寶ばかりは三界六道を経、三毒五蓋の煩惱にあへども少しも變ずると云ふ色なきなり。

結尾

④ 此を希有と、離苦と、勢力莊嚴と、最勝と、不改との三寶の

解脱と三寶

【説戒】

六義とは云ふなり。

④ 佛は能く煩惱を壞るの因を説て、正解脱を得せしむ、法は即ち是煩惱を壞するの因、眞實の解脱なり、僧は煩惱を破るの因を稟受して、正解脱を得。

三寶の本義

⑤ 正道解脱是を名て法と爲す、無師獨覺是を名て佛と爲す、能く如法に受る、是を名て僧と爲す。

三寶と我と正歸依の理

⑥ 我は即ち三寶の正體なり、三寶は即ち我等が全體なるを知らば、應せざる三寶あらず、其能く三寶の正體を知るを歸依の道理とす、歸依に別路あらず、只我が正體に歸る時を正歸依とす、我を知らず、只歸依の名のみ思ふは正歸依にあらず、正歸依なるとき、我これ我にあらず、我にあざれば、彼にあらず、彼と我と二も亦なし、この

無しと云ふを我とし彼として三寶たつ、歸依たつ、立てば今の三寶あり、歸依ありて、等しく無上甚深微妙法なり。
【指月假名法語】

第五章 修行

第一節 序

世法にも佛
法にも開
され
任運自然

○今この禪門の修行は、脚下の物を退きて見んとするが如し、心は世間、出世間、佛法、世法、みな打止めて、只爲すもなく、仕業なくして、一物を止めず、世間の塵勞妄想の心をも残さず、仕業をも爲され、又出世間の清淨無相の觀法修行をも爲され、斯の如くして、只飢來れば飯を喫し、渴しては水を飲み、尿をまり、尿をまり、寒くば衣を重

退歩就己

時を知べし

心城と戒律
を守れ

行思相應

ね、熱くば衣を脱ぎ、困すれば眠り、覺れば起き、客來れば笑語し、歸れば又静まり、縁に従ひ、節に觸て背くとなく、争ふとなく、是の如くにして、年深く、日久しければ、自然に凡情蕩けて、別に聖の解なきなり、是を退歩就己と云ふなり、斯の如きの行道心地、如何ぞ諸天守り、魔外も窺ひさはりをなさんや。
【枯木集】

○大凡修行は、時を知るを第一とす、若し時を知らざれば、無益の功德を費し、卻て己が道力を損す、譬へば春は耕し、夏は耘り、秋は收め、冬は藏すが如し。
【快馬鞭】

○演祖の曰く、心城を守り、戒律を奉じ、日夜に之を思ひ、朝夕に之を行ふ、行ふと思を越ゆるとなく、思行に越ゆるとなし、其始ありて、其終を成す、なほ耕者の畔あるが如

初心工夫の注意事項

し、其過ち鮮きなり。【三事坦然集】
 ④ 第一初心辨道功夫の時、長病すべからず、遠行すべからず、讀誦多かるべからず、諫諍多かるべからず、營務多かるべからず、五辛を食ふべからず、肉を食ふべからず、諸の不淨食を食く乳を食ふべからず、飲酒すべからず、諸の不淨食を食ふべからず、伎樂歌舞等を觀聽すべからず、諸の殘害を見るべからず、諸の卑醜事を見るべからず、國王大臣に親近すべからず、諸の生硬物を食すべからず、垢膩衣を著くべからず、屠所を歴見すべからず、舊損せる山茶及風病藥を喫すべからず、諸榼を喫すべからず、蘇蜜等を喫すべからず、諸の類に親厚するべからず、莫れ、名利の事を視聽くと莫れ、多く梅子及乾栗を喫するべからず、龍眼、荔枝、橄欖等を喫するべからず、莫れ、多く砂糖、霜糖等を喫するべからず、莫れ、厚き綿襖を著ると莫れ、綿を著けざると莫れ、兵軍食を喫するべからず、莫れ、往て喧嘩の聲、車轟の聲、猪羊等の群を觀ると莫れ、往て大魚、大海及惡畫、傀儡等を觀ると莫れ、尋常、青山、谿水を觀るべし、直須らく古教照心すべし、乃至尋常亦須らく洗足すべし、身心惱亂の時、直に須らく菩薩戒の序を默誦すべし。

眞個の修業

⑤ 我宗は直に因中の果を辯じて、果上の因を修す、因已に是の如し、果何ぞ然らざらん、請ふ草木、種植の事を以て試に之を察して、看よ、彼の二乘、外道、小乘の菩薩の如きは、間神力を顯し、異跡を示す者は、彼小法を樂ひ、小果を

見性と神通

在家修行と三心三修

成ずがる故に、小定の力に依て小神力を發するが故に、小威徳を以て小教化を起すが故に、大果を成ずると能はず、佛智を測ると能はず、大根の衆生を接すると能はず、最上乘の法に流通すると能はず、皆是小根小智小志行錯て本を捨て末を逐ふ、縱使神通光明無量の道法を成就するを得るも、見性に非ざるが故に、眞の佛法に非ざるが故に、自性所現の法門に非ざるが故に、眞の佛法に神通光明を得んと欲せば、先須く見性すべし。

【宗門無盡燈論】

⑥ 在家の諸善者、漸々修學の功力を以て、出離解脱の佛門に入んと要せば、先づ六寂光門に依て修行すべし、三心と三修と、是を六寂光門と云ふ、所謂三心とは實知決定

理入と行入

心、二には悉皆回向心、三には知恩報答心是なり、所謂三修とは、一には諸惡莫作修、二には衆善奉行修、三には自淨其意修、これなり、此三修は一佛二佛の教にあらす、十方諸佛の教みな是の如し。

【臨在家語】

⑦ 夫れ道に入ると多途なれども、要をもて之を言は、二種を出でず、一にはこれ理入、二にはこれ行入なり、理入とは、謂く教に藉り、宗を悟り、深く、含生同一の眞性を信じ、たゞ客塵妄想の爲に覆はれて、顯了するを能はず、若し妄を捨て、眞に歸して、壁觀に凝住すれば、自なく他なく、凡聖等一、堅住移らず、更に文教に隨はず、即ち理と冥符して分別あるとなく、寂然無爲なり、之を理入と云ふ、行入とは、謂く四行なり、其餘の諸行は悉く此中に入る、

濁水を澄し
めよ

世事を放棄
せよ

修行の三方
法

何事をか四なる、一には報冤行、二には隨緣行、三には無所求行、四には稱法行なり。

【四行觀】

⑧ 世間修行の人は、濁水を澄すが如し、之を澄しめて清かなりと雖も、未だ濁脚を去らざれば、之を攪く時復濁る。

【楞伽經】

⑨ 修行の人、大に人の長短是非を説くとを忌む、乃至一切の世事、己に關るに非ざるものは、口説くべからず、心思ふべからず、たゞ口に説き、心に思へば、便ちこれ自己を味了せん、若し専ら心を鍊らば、常に己が過を搜れ、那ぞ工夫して他家屋裏の事を管するを得んや、粉骨碎身すとも、たゞ心動すると莫れ。

【盤山語錄】

⑩ 三法ありて、道に進むの捷徑たり、一には智眼明かなる

疑と定心

禪と戒

べし、二には、理性通すべし、三には、志堅固なるべし、智眼明かなる時は、世間身心現量の境界、一切の是非憎愛、取捨得失、貧富、壽夭、苦樂等の法はみなこれ夢縁にして、了に實義なしと照破して、分別を起さず、理性通する時は、徒上佛祖所説の語言名相に於て、三教の聖賢諸子百家の差別の法要に至る迄、會して一源に異見を生せず、志堅固なる時は、今日より、未來際に至るまで、近遠を問はず、若し徹證せざれば、決定して休まず。

【東語西話】

⑪ 禪は須く參究すべく、戒は須く持つべし。これ空拳の小兒を誑すにあらず。直下頓に心地の法を明めば、超凡入聖更に誰にか由らん。

【芝林集】

⑫ 疑覆を以ての故に、諸法の中に於て定心を得ず、定心無

き故に、佛法の中に於て空しく護る所なし。

【禪波羅蜜經】

③ 眞實の道人は、佛すら猶心頭に置かず、況や貪愛五欲をや。

【大智度論】

④ 道は之を悟るを難しとす、既に悟らば、之を守るを難しとす、既に守ては、之を行ふを難しとす。

【靈源記聞】

⑤ 草堂の清和尚曰く、原を焼く火は、炭々より生ず、山を懐るの水は、涓々より漏る、夫れ水の微なる土を棒ても塞づべし、其盛なるに及んでは、木石を漂はし、丘陵を没す、火の微なるは、水を勺でも滅すべし、其盛なるに及んでは、都邑を焦し、山林を焼く、夫の愛溺の水、瞋恚の火と曷ぞ常に異らんや、古の人、其心を治むると、其念の未だ生

心頭に佛なし
行ふと難し

物は微なるに妨げ

時と奮勵

せず、情の未だ起らざるに妨ぐ、所以に力を用ゆること甚だ微にして、功を收むると甚だ大なり。

【禪門寶訓】

⑥ 古の人、其血氣壯盛の時に當て、光陰の往き易きことを慮る、則ち朝に念ひ、夕に思ひ、戒め、慎んで、彌々懼る、情を恣にせず、逸欲せず、惟道是を求む、遂に能く其令聞を全ふす、若し夫れ之を破るに逸欲を以てし、之を敗るに恣情を以てせば、救ふべからざるに殆し、方に足を頓しめ、腕を振て、之を追へども、晩からん、時得がたくして、失ひ易し。

【菴林集】

⑦ 夫れ道の爲にする者は、譬へば一人と萬人と、戦ふに鎧を挂て、門を出で、意或は怯弱に、或は半路にして退き、或は格闘して死し、或は勝を得て還るが如し、沙門の學道

學道と勇氣

佛種と佛法

辨道と修行

不修を怖るべし

修行の規則

は當に其心を堅持し、精進勇銳にして、前境を畏ざれば衆魔を破滅して、道果を得べし。【四十二章經】

○佛種は縁より起り、佛法は頭より起る、良縁に遇ふては蹉過すべからず、當に修行すべし、修行に折伏あり、接取あり、這頭に在て蹉過すべからず、當に辨道すべし、辨道に修行あり、工夫あり、一朝打徹すれば、萬法圓に成ず、若し未徹なれば、萬法と蹉過す。

○寒苦を怖るゝと莫れ、寒苦未だ人を破らず、寒苦未だ道を破らず、たゝと莫れ、暑熱未だ人を破らず、暑熱未だ道を破らず、不修を怖るゝと莫れ、寒苦未だ人を破らず、寒苦未だ道を破らず、不修を怖るゝと莫れ、暑熱未だ人を破らず、暑熱未だ道を破らず、不修能く人を破り、道を破る。

○たゞ當に善知識を見んより、修行の儀則を諮問して、一向に坐禪辨道して、一知半解を心にとゞむると勿れ、佛法の妙術、それ空しからじ。

を得る所堅ければ失ふ所亦難し

佛祖の要訣

佛道の正路

無修の修

○泰山に鳥あり、曾崖の木末に巢くふ、才者及ばず、千仞の淵に魚あり、深泉の幽穴に潜る、筌者得ず、蓋し其託する所愈々高ふして、棲む所愈々安く、潜るゝ所愈々深ふして、生ずる所愈々適すればなり。

○佛法修行と云ふは、正傳の善智識に値て、佛々祖々の修證せる要訣を明め得ざれば、多年辛勞しても徒事なり、乃至萬事を抛棄て、只情識を離れて、迷の根源を斬り、三昧の光明を發して、般若の智慧を開くべし、これ即ち佛の知見にして、學佛道の正路なり。

○人々本有圓成の佛、古に輝き今に騰て大光を放つ。

佛法の爲に
佛法を修す
べし

細究せよ

参禪と勇猛

惡鈿鍍に觸れて爐鞴を出づれば。黄金色上更に黄を添ふ。【見桃録】

④行者は自身の爲に佛法を修すべからず、名利の爲に佛法を修すべからず、果報を得んが爲に佛法を修すべからず、靈驗を得んが爲に佛法を修すべからず、たゞ佛法の爲に佛法を修する、乃ちこれ道なり。【學道用心集】

⑤學道は先づ須らく細しく心を識るべし、細が中の細、細して尋ぬべし、可の中に尋て尋ぬる處なきに到て、方に凡心即ち佛心なりと信せよ、故に知る、即ち一念生死の心中に於て、能く諸佛不思議の事ありと信ずると甚だ難しと爲すとを。【宗鏡録】

⑥參學はこれ猛烈大丈夫の事業なり、手に金剛王寶劍を

提て、佛來魔來を問はず、若し之に嬰るとあらば、尸萬りに横はらん。

参禪に秘訣なし

参禪と利智

⑦古人云く、参禪に秘訣なし、只生死の切ならんことを要すと、所以に世間の憎愛取捨得失是非、凡そ目前一切の境縁一時に放下して、綿々密々に参窮し去れ、歳深く日久くして、工夫純熟せば、忽然として睡夢の醒むるが如く、蓮華の開くが如くならん、那時甚の生死か怖るべく、涅槃の求むべきかあらん。【寂室録】

⑧参禪も亦然り、寧ろ拙に失するとも、利に失するとも、勿れ、寧ろ愚に失するとも、智に失するとも、勿れ、若し夫れ纒に利智に失すれば、淵源を窮むると能はず、死に到るまで情量凡解の間に陷墜するのみ、須らく知るべし、利智は

心性しんせうを明あきらかにすべし

身心しんしんを捨すつべし

身心しんしん脱落だつらく

佛心ぶつしんを究きわめよ

自己じこを参さんぜよ

悟門ごもんを妨さまたぐとを。

⑤ 夫れ参禪學道は元これ根本に達し、心性を廓明せんが爲なり、若し根本に至らざれば、徒に死して己に迷ひ他に迷ふ。

【槐安國語】

④ 夫れ参學は、身を捨て心を離るべし、若し未だ身心を脱せずんば、即ちこれ道にあらず。

【傳光錄】

③ 参禪は本より身心脱落なり。

【遠羅天釜】

② 参禪は、須らく胸中を打併して淨潔ならしめ、情識の中重き所を去卻して、單々に只自己を持て参取すべし。

【佛光錄】

直に見よ

参禪は病を知るべし

① 學道は別に道理なし、只直下に見、直下に聞かんことを要す、直見は見なく、直聞は聞なし、須らくこれ内外打成一片の田地、穩密にして始て得べし。

【龍門夜話】

⑥ 参禪の士は、當に禪に参するを以て貴しと爲すべし、参禪の功は必ず病を識るを以て先と爲す、病を識らざる時は、禪も偽禪たり、禪既に偽なる時は、道も外道たり、所以に人を争ひ、我を競ひ、名を貪り、利を逐ふ、今日の禪たる是なり、如何がこれ病、老僧開堂二十年來人に逢て、心と説き、性と説き、道を説き、禪を説き、權を説き、實を説き、照を説き、用を説く、並にこれ無始劫來の深重の病根、未だ破除すると能はざればなり。

⑦ 汝今斯の道を學ばんと欲せば、須らく四種の避忌ある

参禪の四用

心じん 第一心だいいしんを立たてよ

志こころざしを專せん一いつにせよ

とを知るべし、一には心を立つると正しからずんばあ
るべからず心を立つるとは即ち道を造るの本にして、
屋を造るの基あるが如くなるを以てなり、若し心を立
つると正しからざる時は、基先づ缺陷して道必ず邪と
なる、禪定智慧ありと雖も、皆魔業となる、豈に以て聖人
の道に入るべけんや、故に今道に入るの始に、一切の名
譽を希ひ、利養を圖り、生滅を起し、人我を争ふ等の心を
ば悉皆屏除して可なり。

二には心を用ゆると専らならずんばあるべからず、無
上の妙道は、粗人浮氣の入るべきに非ず、必ず其志を一
にし、其神を定めて、専ら以て之を求めば、企て及ぶべき
に庶かるべし、若し心を他岐に分たば、則ち方寸既に雜

りて、濁智流轉し、邪氣外より乗じて、斯の道と背て馳せ
ん。

舊見きゅうけんを棄すつべし

新智しんち識しきに泥なじむ勿なれ

三には宿解しゆくげ損すんてずんばあるべからず、學人がくにん昔むかしし經卷きやうくわんの
上に於て分別ぶんべつし、師友しいうの邊へんにありて、商量じやうりやうし、種々しゆしゆの見けんを
起す、之を執しゆして實じつと爲なす時は、靈機れいき礙けいして、妙悟めうぶ彰あは
れず、必ず須すべらく蕩たうし去さて、方に能よく新悟しんごを發起はつしすべし。

四には新解除しんげのぞかすんばあるべからず、鑽研せんけんすると久ひさふ
して、忽然こつぜんとして新解しんげ頓とんに坐ざす、或は境きやうに遇あふて、便すなはち四
句くを成じやうす、此乃こゝろすなはち聰明そうめいの境界きやうがい正まさにこれ陰魔病いんまびやうを作なす、行ぎやう
人達にんたうせすして、以て妙悟めうぶとするは、其禍細そのわざはひさいに非あらず、必ず自みづか
ら覺さとるべし、大抵たいてい此解こゝろげその巧妙きやうめうを極きはむと雖も、之を要えうす
るに、必ず境きやうに依よつて發はつす、故に眞實しんじつにあらず、若し剩除じやうぢよに

疑と工夫

疑は工夫の種なり

急ならずんば、神機何に由て廓徹せん、この上の四種並にこれ生死の重病なり、其一を犯すに隨て、必ず唐く損つ、必ず須らく深く自ら省察して之を剪滅すべし、然して後に方に宗門下の眞實の用心と稱すべき者なり。

【鼓山晩錄】

④ 工夫は只疑深くして、他途にわたらず、一公案を提撕ある時は、了悟の日極めてあるとなり、了期なきとは、只工夫の疑よわき故なり、大疑の二字、千語萬句の要なり。

【澤水假名法語】

④ 物を見る時は、見る底を疑ひ、物を聞く時は、聞く底を疑ひ、事繁くして物に奪はれ易き時は、奪る底の物を疑ふ、此奪はる底の物は何物ぞと疑ふ時は、奪はれても、又工

疑の凝結を貴ぶ

用心の十種

夫の正念を離れず、病ある時は、其苦惱を以て工夫の種とすべし、兎に角に工夫は事の多きも、又益々進むの一端なるべし。

【快馬鞭】

④ 夫れ人心の機は凝結せずんば開豁するに能はず、隆冬閉塞して、實に泰元を醸すが如し、若し氣泄て完らざる時は、其發生必ず力なし、故に疑を貴ぶ者は、其疑ふ時は凝結するを貴ぶ。

【禪餘外集】

④ 今且く十法を以て學者の用心を示さん、請ふ之を審細にせよ、一には悲願深重、二には志氣高邁、三には識量寛大、四には智鑑高明、五には見道超詣、六には履踐明白、七には人情杜絶、八には世念捨捨、九には慚愧親切、十には疑心審細、此十法を以て常に己が心を試み、能く此法を

病は修養の一助なり

其本を固ふ

信じ、能く此法を修せば一切成辨すると掌を指すが如きののみ。

【宗門無盡燈論】

④ 世人病を以て苦と爲す、先徳の云く、病は衆生の良薬なりと、夫薬と病とは反す、奈何ぞ病を以て薬を爲すや、蓋し形あるの身は病無き能はず、これ理勢の必然たる所なり、然れども無病の時は嬉怡放逸にして、誰か之を病る者ぞ、唯だ病苦身に逼て、始て四大實に非ず、人命無常なりと知るなり、則ち之を一機に悔悟す、修進の一助なり。

【竹慈隨筆】

⑤ 家を營む者は本貨財に在り、身を養ふ者は、本元氣にあり、世に其本を固ふせずして、外飾を事とする者あり、未だ廢して且つ敗れざるはあらず。

【東語西話】

心城を守れ

用心

研究 耳得見得心

④ 常に心城を守りて心王を護し、常に心馬に鞭ちて心賊を追ひ、常に心劍を揮つて心兵を警め、常に心弓を握て心怨を退く、若能く恁麼に心を用ゆる時は、閻化を出でず、坐ら清平を致す、謂つべし、文武場中の英雄、萬木叢裏の翹楚なりとす、能く恁麼に工夫する時は、參禪學道亦其中に在り。

【出山廣錄】

⑤ 粥の時は身も心も唯粥の用心にて坐禪も餘の勤めも、心に懸けられまじく候、是は粥の時節を明らめ、粥の心を悟ると申し候なり、此時佛祖の意殘る所なく、悟るとにて候。

【十二時法語】

⑥ 耳を以て聽受して得る者は、目を以て看讀して得る者の廣きには如かず、目を以て看讀して得る者は、心を以

練心と長命
不老其一

其二

て悟明して得る者の其廣きを極むるには如かず、心を以て君と爲し、目を以て臣と爲し、耳を以て佐使と爲さば可なり、目を用ゐて心に當つるはこれ下なり、耳を用ゐて目に當つるは又下の下なり。

【竹窓隨筆】

○ 臍下一寸半を氣海と云ひ、元氣を收め養ふ所なり、其下を丹田と云ふ、精神を鍊磨するの府なり、神氣常に此内に充實する時は、無病堅固にして、不老長命なり、是故に眞人は氣を使はず、精を勞せず、神を屈せず、養生の術は國を守るに齊しと。

○ 精氣常に丹田に充る時は、内凶動くことなく、外邪侵すこと能はず、六賊退散し、四魔潜伏し、筋骨堅く、血脉通じ、心安く、神健なり。

【龍庵假名法語】

其三

菩提心とは

○ 常に心氣をして、臍輪氣海丹田腰脚の間に充しめ、塵務繁絮の間賓客揖讓の席に於ても、片時も放退せざる時は、元氣自然に丹田の間に充實して、臍下瓠然たる事、未だ篠打せざる鞠の如し、若し人養ひ得て斯の如くなる時は、終日坐して曾て飽かず、終日誦して曾て倦まず、終日書して曾て困せず、終日説て曾て屈せず、縦ひ日々に萬善を行すと雖も、終に退惰の色なく、心量次第に寛大にして、氣力常に勇壯なり、苦熱煩暑の夏の日も、扇せず、汗せず、玄冬素雪の冬の夜も、襪せず、爐せず、世壽百歳を閱すと雖も、齒牙轉た堅剛なり、怠らざれば長壽を得。

【遠羅天釜】

○ 先代の佛祖は、みなこれ道心の士なり、若し道心なくん

度衆生也

眞の菩提心

菩提心の意 義其一

ば萬行虚設し、然らば則ち參學の雲水須く菩提心を發すべし、發菩提心とは則ち衆生を度するの心なり。

⑤ 無常菩提は自の爲にあらず、他の爲にあらず、名の爲にあらず、利の爲にあらず、然して一向に専ら無上菩提を求て精進不退なる是を發菩提心と名く、既に此心現前を得ては尙菩提の爲に菩提を求めず、此はこれ眞實の菩提心なり。

⑥ 菩提心とはなほ大道の如し、普く大智の城に入るを得せしむ、菩提はなほ正濟の如し、人をして諸の邪法を離るゝとを得せしむ、菩提心はなほ大車の如し、普く能く諸の菩薩を運載するが故に、菩提心は猶ほ門戸の如し、一切の菩薩の行を開示するが故に、乃至菩提心はなほ

其二

衆生の導手

發心の意義

發心と黄金

ほ舍宅の如し、一切の衆生を安穩にするが故に。

⑦ 菩提心はなほ慈父の如し、一切の諸の菩薩を訓導するが故に、菩提心はなほ慈母の如し、一切の諸の菩薩を生長するが故に、菩提心はなほ乳母の如し、一切の諸の菩薩を養育するが故に、菩提心はなほ善友の如し、一切の諸の菩薩を成益するが故に。

【宗鏡錄】

⑧ 菩提心を發すと云ふは、己未だ渡らざる先に一切衆生を渡さんと發願し營むなり、其形いやしと云ふとも、此心を發せば、既に一切衆生の導主なり。

⑨ 發心とは始めて自らは未だ得度せざるに、先づ佗を渡さんとこの心を發すなり、之を初發菩提心と云ふ。

⑩ この發心より、後、大地を擧すれば皆黄金となり、大海を

佛の掟

かけば忽ちに甘露となる。
⑤明かに知るべし佛祖の學道必ず菩提心を發悟する先
とせり、これ即ち佛祖の常法なり。
【正法眼藏】

第二節 信仰

誠と感應

第一項 信心

①夫れ誠なる時は必ず感ず、感ずる時は必ず應ず、應ずる時は必ず驗あり、驗ある時は必ず退かず、退かざる時は必ず成る、これ發心學道の者の感應を尙ぶ所以なり。

【獨庵護法集】

信者と不信者

②善男子、人に二種あり、一には信、二には不信なり、菩薩當に知るべし、信者はこれ善なり、不信者は名て善と爲さず、復次に信に二種あり、一には常に僧坊に往く、二には

二種の信者

往かず、菩薩當に知るべし、其往く者は善なり、其往ざる者は名て善と爲さず、僧坊に往く者に復二種あり、一には禮拜、二には不禮拜なり、菩薩當に知るべし、禮拜の者は善なり、不禮拜の者は名て善と爲さず、其禮拜する者に二種あり、一には法を聽き、二には聽かず、菩薩當に知るべし、法を聽く者は善法を聽かざる者は名て善と爲さず、其聽法の者に復二種あり、一には主心に聽く、二には不主心菩薩當に知るべし、主心に聽く者はこれ則ち善と名け、不主心の者は名て善と爲さず、主心の聽法に復二種あり、一には義を思ふ、二には義を思はず、菩薩當に知るべし、義を思ふ者は善なり、義を思はざる者は名て善と爲さず、其義を思ふ者に復二種あり、一には説の

信心と得道

如く行し、二には説の如く行せず説の如く行する者はこれ則ち善と爲し、説の如く行せざるは名て善と爲さず、説の如く行する者に復二種あり、一には聲聞を求め、一切苦惱の衆生を利安し饒益すると能はず、二には無上大乗に廻向して、多人を利益し、安樂を得せしむ、菩薩應に知るべし、能く多人を利して、安樂を得せしむる者は最上最善なり。

【涅槃經】

隨を得ると法を傳ふると必定して至誠により、信心に
よるなり、誠心外より來る跡なく、内より出づる方なし、
只正に法を重くし、身を軽くするなり、世を遁れ、道を住
家とするなり、聊かも身を顧みると法よりも重きには
法傳はれず、道得るとなし。

【正法眼藏】

佛道を信するは自己を信するなり

信と迷根

大信を起すべし

信仰と動物

④ 佛道を修行する者は、先須く佛道を信すべし、佛道を信する者は、須く自己本より道中にありて迷惑せず、顛倒せず、増減なく誤謬なしと云ふことを信すべし、是の如くの信を生じて是の如くの道を明め、依て之を行ふは、乃ち學道の本基なり。

⑤ 大凡自己佛道に在ることを信するの、人最も得難し、若し正しく道に在りと信せば、大道の通塞を了し、迷悟の職由を知るなり。

⑥ 實相の理は止心中に在り、勞しく遠く覓るとなかれ、近ければとも識らず、之を説けども信せず、故に難信と云ふ、是を以て須らく大信を具して、方に纖疑をも斷すべし。

⑦ 若し法を聞くとある者は、一として成佛せずと云ふと

無心の難易
と信仰

信と本來自
己の發見

なし、泥蛤法を聞て天に生じ、魔衆經を聽て惡を悛む。

【宗鏡錄】

⑧ 何の心も無きとは、易きに似て難く、又難きに似て易く、只道心の深きと淺きと、信心の有と無きとのかはりにて候疑はず信心すれば、易く佛となり、信せずば六道を廻り、長く苦に沈むべし。

【廿三問答】

⑨ 悟は元の自性なり、自性これ佛、佛これ道、道これ智慧なり、此智慧は人々具足し、箇々圓成して、諸佛衆生の本地の風光、本來の面目なり、此を悟るとたい志によりて、文字を知ると知ざるとの隔なし、たとひ我名を覺えず、一字を知ざる鈍根の者なりとも、此理を信じ得たる者を利根とす、縦ひ一字を見て萬事を見るときも、此理を信じ

佛の信仰力と成

信仰と悟

信心ある人は誠なり

得ざる者をば鈍根とす。

【鹽山和泥合水集】

⑩ 身心本來清淨なるを直に信せば、縦ひ今生に悟るとなしと云ふも、此信心によりて、盡未來際惡道に落ちず、成佛すると疑ひあるべからず。

【月庵假名法語】

⑪ 本來生得なる當體が、此身此まゝなものなり、然し其を悟る事が又成り難きものなり、信心さへ厚く、一點も疑はず行すれば、端的に悟るなれど、凡夫は愚痴無智なるが故に、五欲に引れて、我と心を昧まされて、苦を受くるなり。

【大道假名法語】

⑫ 一心ある者は、一心の修行なくんばあるべからず、武家は武にして工夫を爲し、百姓は耕しながら工夫を爲し、貴賤男女、其職を爲しながら爲すべき佛法信心なり、さ

るによりて信心とは、マコトノ心と書けり、信の心となりて悪しと云ふ人は、諸宗諸道諸藝の中、一人もあるべからず。

【澤水假名法語】

③ 兎にも角にも人として信心なければ人でない、此節信心起らねば、全く牛馬に異ならず。

④ 學道は信を存す、信を立つるとは誠に在り、誠の中に存して然して後に衆をして感無からしむ、信を己に存して以て人をして斯くのごとくならしむ、惟信と誠と失なれば補なし、是に知んぬ、誠一ならざる時は心能く保つと莫く、信一ならざる時は言能く行ふことなし。

【施行歌】

⑤ 其心を信じて之を正す時は、誠の常たり、誠の善たり、誠の忠たり、誠の仁たり、誠の慈たり、誠の和たり、誠の順たり、誠の明たり、誠に明かなる時は天地を感じ、鬼神を振はしめ、死生の變化を更て獨り得、これ直だ天地を感じ鬼神を動かすのみに非ず、將又聖人の大道を致さんとする者なり、是故に聖人は其心を信するを以て大と爲す。

【圓悟語錄】

信と諸道徳

信なきは牛馬なり
信と誠

聖教と信心

正信と正智

⑥ 聖人博く之を説き、約に之を説き、直に之を示し、巧に之を示す、皆人の心を正ふして、人に信を與ふる所以なり、人、聖人の言を信せずんば、乃ち其心を信せざるのみ、自ら棄つるなり、自ら惑ふなり、豈に明なり、賢なりと謂はんや。

【輔教編】

⑦ 夫れ正信とは自ら趣くなり、正智とは自ら證するなり、

仁義忠孝と信

信と自由の諸徳義

自ら證する者は疑はず、自ら趣く者は變せず、變せざる者は勞を以て之を退かず、疑はざる者は、外に之て之を取らず、故に曰ふ、自己の胸襟、蓋天蓋地と、故に曰ふ、冷暖自知すと。

⑥ 夫れ仁義忠孝の其心に根ざすは信なり、信は道の元なり、功德の母なり。

【幽谷餘韻】

⑤ 敬で高明の志を爲すべし、慎で黙汚の情を爲すと勿れ、其養ふ所に私意を容れず、流に隨ひ己に克ち、虚谷の響に應ずるが如くなる時は、主の爲に忠を致し、親の爲に孝を致す等、みな自然にして然り、實に自己の方寸より流出し、將ち來て、蓋天蓋地、間斷あるとなし、之を信心と謂ふ。

【正山廣録】

信と善法

信の手と徳の寶

大疑と大信

信と實相

五種の正信

⑤ 信を道元功德の母と爲す、一切の諸の善法を長養す。

【華嚴經】

④ 佛法に入る者、信心の手あれば、道德の寶を採り取るなり、若し信心なくんば、空しく所得なし。

【宗鏡錄】

③ 大疑の下には必ず大信あり、乃至此心一たび發すれば、則ち眞佛現前す、佛自ら知らず、惟だ信じて後知る、法自ら見せず、惟だ證して而して後に見るなり。

【大光明藏】

③ 信心清淨なれば、則ち實相を生ず。

【金剛經】

④ 學道は須く五種の正信を具足すべし、第一には自己方寸の心中、一箇の喜怒哀樂底の主人翁の觀體と、三世諸佛と一毫髪を缺かずと、信ずるを要す、第二には無量

信なきは佛の器に非ず

劫來より聲色愛憎と染習流注して、一種の生死無常を結成して、四大の身中に於て、念念遷流し、新々住らずと信ずることを要す、第三に古人の慈を垂て、一言半句を留め下するとは、天に依る長劍の如し、等閑に撻透すれば、端的に會し、人の命根を斷ずることを信ずるを要す、第四に日用の工夫、但だ做はざることを恐れ、之を做ふて已まず、念念精專ならば、決して透脱の期あらんと信ずるを要す、第五に生死無常は、これ小事ならず、若し決定の志を奮つて、以て獨脱を期せざれば、其三途の苦趣會て自ら免るるの方なしと信ずることを要す。

◎ 佛法を信せざるの衆生は、更に佛法の器となるべからず、佛の言く、佛法の大海には、信を能入と爲すと、明に知

【東語西話】

【永平清規】

信仰の十利

信と利鈍

信と解脱

◎ 不信の衆生とは、未だ共に住すべからずと云ふことを。◎ 信は能く智の功德を増長す、信は能く必ず如來地に到る、信は諸根をして明淨ならしむ、信力堅固なれば能く壞する者なし、信は能く永く煩惱の本を滅す、信は能く専ら佛の功德に向ふ、信を功德不壞の種と爲す、信は能く菩提の樹を生長す、信は能く最勝の智を増益す、信は能く一切の佛を示現す。

◎ 人まさに正信修行すれば、利鈍をわかず、等しく得度するなり。

【正法眼藏】

【華嚴經】

◎ 此一念信心堅固にして、第二念なくんば、只これ今生のみならず、生生世々惡道に落ちず、大解脱大安樂の人と

信と業
信と輪廻

信根

なるべし。

◎此信力強くば、業に曳かされて惡道に落つべからず。

◎只何とも思はぬ心、即ち佛法なり、信せざれば輪廻の業

となる、直に信すれば、即ち生死截斷の處なり、疑ふとな

かれ。

【月庵假名法語】

◎何をか信根と謂ふ、所謂諸佛の心性及無量の智慧本來

具足するを信じ、根に大小無し、機に智鈍なし、修する者

は、即ち得るを信じ、定力の熟するに隨て、諸の現境あ

り、錯て證悟と爲さば、二乗外道の部類に墮するを信

じ、時到り、功充れば、佛性頓に現前して、知解分別を假ら

ざるを信じ、佛性頓に現前すと雖も、宗師に見へず、重

關を透らずんば、一生を錯り了るを信じ、重關を透破

一著子と
は、最後窮
極の理想
と云ふ程
の義

誓願

し、宗旨に通達すと雖も、我宗末後向上の些子、別に生涯

あるを信じ、些子向上の一著子を得ると雖も、各々履

踐に隨て、力用等しからず、大に子細あるを信じ、師承

の一事、最も道理あり、勉て正宗を繼で、孤負すべからざ

るを信じ、脚下より去て、生々唯此養道の一法なるを

を信じ、向上の一著子を提持して、將來に流布して、斷絶

せしむると無とを信ず、是の如く、決定心を生じ、了て大

誓願を發すべし。

◎所謂見性大徹せずんば、畢竟して休せずと誓ひ、寧ろ永

劫に沈淪すべくとも、一念の退意を生ぜじと誓ひ、寧ろ

地獄に入るとも、諸方の教惑を受けじと誓ひ、乃至諸の

現境を認て、二乗外道の見に墮せじと誓ひ、見性若徹せ

譬喻

ば永く菩薩の行を起すべしと誓ひ、佛祖の言教一々明了ならずんば措かずと誓ひ、向上の些子に徹せずんば措かずと誓ひ、佛祖の力用に等しからずんば措かずと誓ひ、卑劣の心を生じて宗風を辱めずと誓ひ、不實の心を挾で而も人情に貪著せずと誓ひ、一個兩個真正の種草を打出して宗風を繼がしめ、以て佛祖の恩を報じ、及び生々世々菩薩の行を行じて、畢竟して一切衆生を度し盡さんと誓ひ、是の如く大誓願を發して、了て諸佛の誓願を以て己が誓願と作し、祖師の志行を以て我志行と作し、通願別願、意に任て發起して、日々に懇禱し、時々に思惟せよ。

譬ば風輪の能く大地を持つが如く、大願の風輪、能く佛

無信者 信と徳

地を持つ譬ば、順風に舟を行るが如し、法性の大海に、般若の舟航あり、若大願の智風に非ずんば、終に動ずること能はず、汝が中路にして三乗の心に滞在し、外道の見に墮して、佛祖の淵源を窮むると能はざる者は、願力微劣なるがためなり。

經に曰く、闡提の人は信心を生せず、殺却すとも罪過なし、若信心あらば、此人是佛位の人なり。

佛法の大海は信を能入と爲す、只能く大信根を立て、這箇を識得し、了らば、直に虚空消殞し、鐵山砕るを得、彼の所謂無爲の徳や、有道の仁や、自然に水至れば、渠成る、正與麼の時、國富み民豊かに、時清く、道平かなり。

【蒼龍廣錄】

念佛の意義

第二項 念佛

○夫念佛と云は當に須く正念なるべし了義を正と爲す、
 不了義を邪と爲す正念なれば必ず往生を得邪念なら
 ば云何が彼に到らんや佛と云は覺なり所謂身心を覺
 察して惡を起さしむると勿れ念とは憶なり所謂戒行
 を憶持して精進を忘れず是の如き義を了する之を名
 て念と爲す故に知る念は心に在て言に非す筈に因て
 魚を求む魚を得れば筈を忘る言に因て意を求め意を
 得れば言を忘る既に念佛の名を稱す須く念佛の道を
 知べし若心實無ふして口空名を誦さば三毒内に臻り
 人我臆に填て無明の心を將て外に向て佛を求めば徒
 爾に功を虚ふせん且誦と念との如きは義理懸に殊な

念佛と滅業

○念佛は利劍なり身の業去るによし必ず佛に成ると思
 ふべからず佛にはならぬが佛なり。
 身の業のつきはてぬれば何もなし、
 假に佛といふばかりなり。 【無難假名法語】

る、口に在を誦と曰ひ心に在を念と曰ふ故に知る念は
 心より起る名で覺行の門と爲す誦は口中に在り即ち
 是音聲の相なるを、外に執して理を求む終に是處無
 し故に知る過去の諸聖修する所の念佛は、皆外説に非
 ず、只内心を推すとを、心は即ち衆善の源、心は萬徳の主
 たり、涅槃常樂真心に由て生ず、三界の輪廻も亦心より
 起る、心は是出世の門戸、心は是解脱の關津なり。

【少室六門】

念佛と惡念

③ 惡念を止むるには、經陀羅尼を讀むがよし、經陀羅尼讀むとならぬ者は、佛名を心に任せて唱ふべし、又は淨土宗ならば、六字を唱へ日蓮宗ならば首題を唱へ、何にてもあれ、心に怠らず唱へ餘念なく、信心堅固に修行する時は、次第に惡念忘想も起らざる様になるべし、或は經又は佛名を一心不亂に怠らず唱へ安心なる時は、自ら信心に身をよせて、惡念妄想を拂ひくり返し、唱ふる所、即ち當體佛なりと知るべし。【大道假名法語】

④ 題目名號も大乘の心より唱へば、みなこれ坐禪工夫に替るべからず。【霧海指南】

⑤ 他佛はみな自佛なり、他を念ずるは還て自を念ずる時に同じ。【禪餘內集】

念佛と坐禪

他佛は自佛なり

自身と淨土

⑥ 心を一にして佛を念じ、志を用ゐて分たず、六根都て攝し、淨念相續く時は、即ち目、色、の爲に染せられず、耳、聲、の爲に染せられず、鼻、香、の爲に染せられず、舌、味、の爲に染せられず、身、觸、の爲に染せられず、意、法、の爲に染せられず、即ち現に娑婆界内に處して、渾身已に蓮華國裏に坐す、又何ぞ後報の清淨ならざるあらんや。【禪餘外集】

念佛と持戒

念佛は參禪に益あり

⑦ 深心に佛を念じ、淨戒を修持するを以ての故に、此等は佛を得べし。【法華經】

⑧ 古に謂く、參禪は念佛を礙へず、念佛參禪を礙へずと、又云く互に相兼帶することを許さずと、然れども、亦禪に淨土を兼ぬる者あり、圓照本、眞歇了、永明壽、黃龍新、慈愛深

佛ぶつ中ちゆう下げ根こんと念ねん

等の如き諸師、みな禪門の大宗匠にして、心を淨土に留めて、其禪を礙へず、故に參禪の人、念々自の本心を究むと雖も、發願して命終の時に、極樂に往生するを願ふことを妨げず、所以は何ぞ、參禪は箇の悟處を得と雖も、尙し未だ諸佛の常寂光に住するが如くなるを能はず、乃至、念佛は惟參禪を礙へざるのみに非ず、實に參禪に益あり。

【竹窓二筆】

九 帝云く、今人ありて念佛す、如何、師云く、如來出世して天人師、善知識と爲り、其根器に隨て爲に法を説く、上根の者の爲には最上頓悟の主理を説き、中下の者には、未だ頓悟するを能はず、此を以て佛韋提希の爲に、十六觀門を開て、念佛して極樂世界に生せしむ、故に經に云く、是

見性けんせいと淨土じやうど

念佛ねんぶつは誰ぞ

心是佛、是心作佛と、心外に佛なく、佛外に心なし、帝云く人あり、經を持して念佛持咒して佛を求むると如何、師云く、如來種々に開讚するとは、皆最上一乗の爲なり、譬へば百千の衆流みな海に歸するが如し、是の如く種々に教を立て、類に隨て開談す、みな薩婆苦海に歸せしめずと云ふと莫し。

【禪林類聚】

念ねん佛ぶつと參さん禪ぜんと同じからざるを疑ふあり、知らず參禪は識心見性を圖り、念佛は自性彌陀、唯心淨土を悟るを、豈に二理あらんや。

【如淨語錄】

念ねん佛ぶつ一聲せいいち或あるひは三五七聲せいごしちせう黙々として返問せよ、這の一聲佛何の處より起る、又問ふ、這の念佛的これ誰ぞ、疑あらば只管に疑ひ去れ、若し問處親しからず、疑情切ならず

念を忘れず
入らば淨土に

異名同體

んば再び箇の畢竟這の念佛的これ誰ぞと擧せよ、前の
一問に於て少問少疑ならば、只向きの念佛これ誰ぞと
諦審諦問せよ。

【智徹語錄】

③優曇和尚念佛的これ誰ぞと提せしむ、汝今必ずしも此
等の法を用ゐず、只平常念じ去れ、但念じて忘れずんば、
忽然として境に觸れ、縁に遇ふて、轉身の一句を打着し、
始て寂光淨土は此處を離れず、阿彌陀は自心を越ざる
とを知らん。

【空谷語錄】

④大凡念佛は生死を脱せんことを要し、參禪は心性を悟ら
んと欲す、未だ心性を悟る底の人、生死を脱せざることを
聞かず、生死を脱する底の人、豈亦心性に迷んや、當に知
るべし、念佛參禪は、名異にして體同じきことを。

【寂室錄】

⑤習禪の人は、先づ念佛すべし、佛を念すれば無量劫の重
罪をして微薄ならしめ、禪定に至ることを得、至心に念佛
すれば、佛も亦之を念す、乃至念佛の人は、諸の惡法來て
擾亂せず。

【思惟略要法】

⑥智慧の淨きに隨て則ち其心淨し、其心淨きに隨て則ち
一切の功德淨し、是故に寶積若し菩薩淨土を得んと欲
せば、當に其心を淨ふすべし、其心の淨きに隨て則ち佛
土淨し。

【維摩經】

⑦唯心の淨土を了して、自性の彌陀を見れば、此界佗方隨處
に快樂なり。

【佛眼語錄】

⑧此心は眼に應じて色を見、耳に應じて聲を聞き、口に在

習禪と念佛

心と淨土

自性と彌陀

彌陀の説法

極樂

安養世界

心を淨ふせ

ては言語す、此を名て阿彌陀佛の今現在して説法すとす、此心本來三世にとほり、十方にわたりにて、諸佛衆生の本源なり。

【鹽山和泥合水集】

⑥ 極樂淨土とて外にあるべからず、汝が心中の三毒をはらふ所、則ち淨土なり、佛と云ふも悟ると云ふも、名は變はれども、同じ道なり、我本心を悟る人を、則ち佛と名くるなり。

【一休假名法語】

⑤ 聖人は物に凝滞なく、萬事に煩惱なきなり、是を指して佛とも極樂とも安養世界とも云ふ。

【大燈法語】

④ 一句の彌陀佛提起して、金剛の若くにして、俗情都て粉碎せば、坦蕩として西方に遊ぶ、但だ自ら其心を淨ふせば、何ぞ土の淨からざることを愁ん。

【禪餘內集】

禪に往生を妨げず

淨土

彌陀其一

③ 大乘妙典に曰く、今此世界は皆これ我有なり、其中の衆生は悉く是れ吾子なりと、然れば釋迦牟尼佛は、一切衆生の慈父なり、慈父の淨土は、寂光世界なり、我慈父の淨土を打捨て、他土の遠方に往生せんと擬するは、將又何の心行ぞや、是を以ての故に、我佛心宗に於ては、敢て他土の往生を求むることを、勸めず、然れども、衆生の機宜區なるが故に、求むるをも亦妨げず、これ佛心宗の佛心に準ずる所以なり。

【臨在家語】

② 瑠璃の寶地、黄金の相、西方に在らず、東に在らず、妄想盡く銷して、一佛に歸すれば、自然に身は藕花の中に坐せん。

① 彌陀の一句他念なし、萬念共に念すれば、本然を見る。

彌陀其二

便ちこれ塵々解脱を成す。更に祖師禪を問ふことを須ひざれ。

④ 人々自ら古彌陀あり。十二時中放過すると莫し。但だ心光長く不味なるを得ば。彈指を勞せずして娑婆を出でん。

【鼓山晚錄】

歸趣と淨土

⑤ 達觀禪師云く若し妄せざれば何ぞ西方淨土を求めん、大凡淨土はこれ清淨の性にして西方はこれ日の落つるの處人をして歸投の處を作さしむるのみ歸投の處を知れば即ちこれ西方淨土極樂世界なり。

【禪林類聚】

彌陀と本性

⑥ 唯心の淨土と曰ふと雖も極樂世界あるとを妨げず、世界は即ち一心の所現なるを以てなり、本性の彌陀と曰

ふと雖も極樂教主あるを妨げず、教主即ち本性の所成なるを以てなり、寂然無生と雖も熾然として生あるとを妨げず、往生にして而も本自ら無生なるを以てなり。

【淨慈要語】

一彈指に往生す

⑦ 西方此を去ると遙ならず、若し不善の心を懷かば、念佛往生到り難し、今善知識に勸む、先づ十惡を除て即ち十善を行し、後ち八邪を除て乃ち八千を過し、念々に見性し、常に平直を行はゞ、到ると彈指の如くにして便ち彌陀を覩ん。

【六祖壇經】

分別心と淨土

⑧ 西方淨土として定まれる處のあるに非ず、西は日月星辰のをさまる方なる故に、一切慮知分別の心のをさまり盡きたる時の心體を名て西方淨土とす。

無心と極樂

心と淨土

苦樂と淨土

⑤ 一切の苦樂は、生滅の心念に依りてあり、心念寂滅して自性無心なれば、苦樂共に斷除す、是を名て極樂とす、生滅々已寂滅爲樂これなり。
【鹽山和泥合水集】

⑥ 若し自心清淨ならば、則ち一切の佛土皆悉く清淨ならん、故に經に云く、心垢るゝ時は、則ち衆生垢れ、心淨き時は、則ち衆生淨しと、淨土を得んと欲せば、當に其心を淨むべし、其心の淨に隨て、則ち佛土淨し。
【少室六門】

⑦ 廁蟲の廁に在るや、犬羊より之を視れば、其苦に勝へず、而も廁蟲は苦と知らず、方に以て樂と爲す、犬羊の地に在るや、人より之を視れば、其苦に勝へず、而も犬羊は苦と知らず、方に以て樂と爲す、人の世に在るや、天より之を視れば、其苦に勝へず、而も人は苦と知らず、方に以て

懺悔の意義

懺悔と衆過

第三節 懺悔

樂と爲す、推して之を極むれば、天の苦樂も亦是の如し、之を知て淨土に生せんを求めば、萬牛も挽くとなし。
【竹窓隨筆】

① 梵語に懺摩此には悔過と云ふ、之を斷相續心と謂ふ、一たび斷たば永く復び續かず、一たび懺へば永く復び造らず、此吾が佛の懺悔の意なり、學道の士、知らずんばあるべからず。
【佛眼語錄】

② 佛の言く、人に衆の過あり、自ら悔て頓に其心を息めざれば、罪來て身に赴く、水の海に歸して漸く深廣となるが如し、若し、人過ありて自ら解して非を知り、惡を改め、善を行ずれば、罪自ら消滅す、病に汗を得れば、漸く瘡損

三皈戒と懺悔

根本業と懺悔

三業懺悔

罪根と懺悔

聲聞と菩薩

【四十二章經】

三 歸戒を受くるの前に於て先づ須く懺悔すべし、然して

四 若し人、重罪を造り、作り已りて深く自ら責め懺悔して

五 我むかし造る所の諸の惡業は、皆無始の貪瞋痴に由

六 極惡の行を作すとも、過を悔ゆれば轉た微薄なり。

七 文殊菩薩の謂せらるゝには、小乘聲聞の戒は、重禁を犯

懺悔の可能なる所以

慚愧と懺悔

悔ゆれば清淨なり

すれば、一生に再び受くるとならず、喩て云はば、大石の破れたるやうなる道理にて、再びつぐと云ふとならぬなり、菩薩の大戒は、喩へ幾度犯しても、幾度も懺悔だにすれば、本戒すたれず、喩て云はば、金銀にて作りたる器の喩へ破れても、幾度も造り直して用ゆる道理なり、故に懺悔の心さへ起れば、盡未來際まで失するとはなきとあり。

八 當に大慚愧を生じて、痛く自ら心を責めて、發露懺悔すべし。

九 設ひ所犯あるも、即ち應に懺悔すべし、悔し已れば清淨なり、善男子、故き隄塘の穿決して孔あるが如し、水則ち淋漏す、何を以ての故に、人の治すると無きが故に、若し

懺悔の五不放逸

實相と懺悔

滅罪と懺悔

人ありて治すれば、水則ち出でず、菩薩も亦然り。
 ④ 若し菩薩戒を學ぶ者は、五の不放逸あるべし、一には已
 犯罪を觀じて、如法に懺悔す、二には當犯罪を觀じて、如
 法に懺悔す、三には現犯罪を觀じて、如法に懺悔す、四に
 は至心に堅持して、犯想を作さず、五には犯し已れば至
 心に懺悔す、是を五の不放逸と名く。【菩薩善戒經】
 ② 一切の業障海は皆妄想より生ず、若し懺悔せんと欲せ
 ば、端坐して實相を思へ、衆罪は霜露の如く、慧日能く消
 除は是故に至心に六清根を懺悔すべし。

【佛祖正傳大戒訣】

③ 信心深く、前に作りし罪過をあらはし後悔すれば、心に
 三つのとがなし、是を懺悔と云ふ、乃至此懺悔を爲す人

は、つまはじきするに、百萬億業の罪を除き、造りおける
 とがは日に霜露の消ゆるが如しと云へり。

【廿三問答】

③ 經豪の鈔に云く、懺悔の法現はる、時三歸三聚戒も攝
 せずと云ふとなしと、又云く、始め懺悔の法によりて、三
 歸三聚淨戒妄を離れずと雖も、妄中に於て解脱を得、妄
 相未だ去らざるに實相到來すとも云ふべしと。

【釋戒鈔】

懺悔と佛
 懺悔と諸佛

④ 心も肉も懈怠にもあり、不信にもあらんには、誠心を專
 らにして、前佛に懺悔すべし、慙麼するるとき、前佛懺悔の
 功德力を救へて、清淨ならしむ。
 ⑤ その大旨懺悔のは、願くは我たとひ過去の惡業多く重

懺悔の諸徳

なりて障道の因縁ありとも、佛道によりて得道せりし、諸佛諸祖我をおはれみて業累を解脱せしめ、學道さはりなからしめ、その功德法門普く無盡法界に充滿彌綸せられん。

⑥ 彼の三時の悪業報必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは重きを轉じて輕受せしむ、又滅罪清淨ならしむるなり、善業また隨喜すれば、愈々增長するなり。

【正法眼藏】

⑦ 若し能く如法に懺悔すれば、所有煩惱悉く皆除く。猶ほ劫火の世間を壞り、須彌并に巨海を燒くが如し。懺悔は能く煩惱の薪を燒き、懺悔は能く天路に往生し。懺悔は能く四禪の樂を得、懺悔は寶摩尼珠を雨

多惡は一善に及ばず

十戒と懺悔

ふらし。懺悔は能く金剛の壽を延ばし。懺悔は能く常樂の宮に入り、懺悔は能く三界の獄を出で。懺悔は能く菩提の華を開き、懺悔は佛の大圓鏡を得。懺悔は能く寶所に至る。

【心地觀經】

⑧ 金色の花千斤あるも、眞金の一兩には如かざるが如く、罪を造ると多しと雖も、少善の徳には如かず、佛に對ひて懺悔を作すは、盲人の自ら視へざるを以て、人も己が悪事を作すを見ざるべしと思ふに同じ、故に佛の前に於て大衆に懺悔すべし、罪はもと自性なきが故に、善縁に従へば必ず滅せん。

⑨ 若し十戒を犯すとあらん者は、應に教て懺悔せしむべし。

【梵網戒經】

犯戒と懺悔の有無

◎菩薩十重に八萬四千の威儀戒あり、十重は犯ありて、悔なし、重て受戒せしむるを得ず、八萬四千の威儀戒は、盡く輕と名く、犯あらば悔過せしむるを得、對首して悔滅す。

【瓔珞本業經】

第四節 戒定慧三學の意義

第一項 序

三學と佛典

三學の意義

①戒定慧は佛典の大綱なり、機に従ひ宗に趣く、千萬科大綱を離るゝ時は立する所なし、無戒の定はこれ邪定なり、無定の慧はこれ亂慧なり、三學立つと正ふして、佛門立つ、三學壞すれば乃ち佛門倒る。

②唐の宣宗帝問ふ、何を戒定慧と名く、師云く、防非止惡之を名て戒と爲す、六根境に涉つて心縁に順せざる、之

【釋氏憲法】

を定と爲す、心と境と俱に空して、照覽惑なき之を名て慧と爲す。

【禪林類聚】

三學の主客と先後

◎三學の中、戒を以て首と爲す、定、慧之に次ぐ、所謂持戒を平地と爲し、禪定を屋宅と爲して、能く智慧の光を生じて次第に明照を得、定、慧の力、莊嚴し、萬行為に具足し、乃至佛道を成ずるまで、悉く戒を本と爲す、と宜なる哉、言や、譬へば病に灸するが如し、其初の一一壯、これ甚だ熱ふして堪忍し易からずと雖も、若し之を除て二三壯を灸すと言は、決して是處あるとなし、法に三學あるも亦復是の如し、戒は灸に初壯あるが如し、定慧は二三壯の如し、若し此序に由らずんば、亦豈煩惱の重病を平治するを得んや。

【禪戒訣】

佛道の大綱

妙心と三學

坐禪

三學と人心

④ 夫れ戒定慧の三要は佛道萬古の大綱なり、誰か敢て輕忽にせんや。
【遠羅天箋】

⑤ 夫れ戒定慧は三乘の達道なり、夫れ妙心は戒定慧の大資なり、一妙心を以て三法を統ぶ、故に大と云ふ。
【輔教編】

⑥ 今の坐禪は、戒として持せざるをなく、定として修せざるをなく、慧として通せざるをなく、降魔、轉輪、涅槃、みな此方に依て神通妙用、放光說法、盡く打坐にあり。

⑦ 四祖の云く、夫れ百千の法門同じく方寸に歸し、河沙の功德總て心源にあり、一切の戒門、定門、慧門、神通、變化、悉く自ら具足して、汝が心を離れずと。
【普勸坐禪儀】
【真心直說】

鼎の如し

三學の大事

定慧等用

⑧ 夫れ戒定慧の三學は、佛法の三綱にして、鼎の三足の如し。
【說戒】

⑨ 三學は皆吾聖道にして、實に鼎足たり、而して傳法の祖多く定を語て、少に戒を言ふとは、蓋し接物の舒促なり、道豈に偏頗あらんや、正脈を次でより、已來既に戒を以て基本と爲す、これ定能く戒を轉じ、戒能く定を護り、定戒等しく學んで、吾道を立つるが故に、禪門の戒、何を以てか、其一大事因縁となすことを知らずんばあるべからず、其知るや、理に親き者は事に疎く、事に順ずる者は理に逆ふ、たゞ當に事理兩つながら純粹にして、實に大事の大事たる處あることを知るべし。
【禪戒篇】

⑩ 問ふ、涅槃經に云く、定多く慧少きは無明を離れず、定少

く慧多きは邪見を増長す、定慧等しきが故に即ち解脱と名くと、其義如何答ふ、一切の善惡に對して悉く能く分別する是れ慧なり、所分別の處に於て愛憎を起さず所染に隨はざるこれ宗なり、即ちこれ定慧等用なり。

【禪海探珠要訣集】

定慧を本とす
定慧と體用

②善知識、我此法門は定慧を以て本と爲す、大衆迷ふて定慧別なりと言ふと勿れ、定慧は一體にしてこれ二ならず、定はこれ慧の體、慧はこれ定の用、慧の時、定は慧に在り、定の時、慧は定に在り、若し此義を識らば、即ちこれ定慧等學なり、諸の學道の人、定を先にして慧を發し、慧を先にして定を發す、各々別なりと言ふと莫れ、自悟修行は諍に在らず、若し善後を諍へば、即ち迷人に同じく、乃

至、なほ燈光の如し、燈あれば即ち光あり、燈なければ即ち闇し、燈はこれ光の體にして、光はこれ燈の用なり、各々二ありと雖も、もと同一なり、此定慧の法も、亦復是の如し。

【六祖壇經】

定慧と父母
持戒と定慧

③定を父と爲し、慧を母と爲す、能く千聖の門戸を孕み、根力を増長し、聖胎を養ひ、念々出生して佛道を成ず、定は將たり、慧は相たり、能く心王を弼て無上を成し、永く群生證道の門となる。

【定慧相資歌】

三學相資

④若し戒を持たずんば、定を得るに由なけん、若し定を得ずんば、慧を發するに由なけん、戒定慧具らずんば、則ち貪瞋痴日に長せん。

【黃藥清規】

④戒に非ざれば、以て定を生ずると能はず、定に非ざれば

戒を先とす

自性に固有の戒定慧

以て慧を生ずるとなく、慧に非ざれば以て戒定を成するとなし、猶ほ險路を経過する者の目足ありと雖も、導師なき時は達するに能はざるが如し、戒は譬へば足の如く、定は譬へば目の如く、慧は譬へば導師の如し、所以に三學相資くるとは、猶ほ鼎の三足の如く、一を缺く時は、三皆立つと能はず。

【獨菴護法集】

參禪問道には、戒律を先と爲す、若し過を離れ、非を防がずんば、何を以てか佛と成り祖と作らん。【百丈清規】

六祖大師云く、心地に非なきは自性の戒、心地に亂なきは自性の定、心地に癡なきは自性の慧、若し人端的に自性の戒定慧を明め得る時は、百千の法門、無量の妙義、も自ら圓成す、外に覓むるを假らず、謂つべし塵中の

大丈夫なりと。

【還山錄】

第二項 戒律

序

○戒律は佛門に入る捷徑、六賊をふせぐ壁壘、法財を守るの城廓なり、城廓堅からざる時は、生死の敵に滅され、恥を閻老の前にさらし、苦を無間の底に受く、而も戒律は天下の規範なり、王道律ある時は、四海靜謐し、仁義不律なる時は、喧嘩起り、風雨律なる時は、國土安穩なり、耕農不律なる時は、五穀實らず、如何に況んや佛家をや。

【鹽山和泥合水集】

○世尊四十九年の教海、波瀾浩々乎として究むべからず、之を要するに、經律論の三藏、戒定慧の三學を出でず、後來天台の智者、之を判するに、五時八教を以てし、法藏重

佛教と戒律

戒は人の病より作る

正傳戒

ねて判ずるに五教を以てす、其理至れり、然して戒は當頭第一の事、三千の威儀、八萬の細行、乃至禪定、智慧、此戒に依らずと云ふとなし、所以に道ふ戒は明かなる日月の如く、亦瓔珞珠の如しと。
【明菴語錄】

③ 世尊の戒を説き玉ふは、天の設に由るに非ず、天の造るに非ず、即ち人性の本より有する所なり、良に以れば、人心無明の爲に覆はれて、妄に身心の相を起す、遂に乃ち惑を起し、業を造て輪廻して已まず、是に由て諸佛は人性の本より有する所に因て此戒を立て、是病に因て薬を興ふ、風なきに浪を作すと曰ふに非ず。
【波山晚錄】

④ 恭しく惟れば、佛祖正傳の菩薩戒、是を金剛寶戒と號し、或は千佛の大戒と名け、亦は七佛の戒法と曰ふ。

菩薩戒と聲聞戒

大小乘戒

佛戒

⑤ 初發心より乃ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得るに至る、是を菩薩戒と名く、若し白骨を觀じ、乃至阿羅漢果を證得する、是を聲聞戒と名く、若く聲聞戒を受持するとある者は、當に知るべし、是人佛性及び如來を見ず、若し菩薩戒を受持するとある者は、當に知るべし、是人阿耨多羅三藐三菩提を得、能く佛性と如來と、涅槃とを見りと。
【佛祖正傳大戒訣】

⑥ 戒に大乘小乗の差別あり、小乗戒は輪廻を厭ふによりて淫戒を第一に戒めたり、大乘戒は慈悲を専らにするによりて殺生戒を第一に立つるなり。
【霧海指南】

⑦ 佛戒とは清淨の心是なり、若し人ありて發心修行して清淨に行ひ得て、所受の心なき者を、佛戒を受くと名く。

自性清淨戒

⑧ 梵音忍茂の二上人戒を求め、上堂を請ふ人々箇の本源自性清淨戒あり、圓滿に具足して缺くることなく、餘すもなく、虚空に逼塞し、正報に充滿す、且く道へ箇の中誰か受け、誰か學び、誰か修し、誰か證す、大衆知るや、摩、自、ら、瓶を携へ去つて、村酒を沽へ、又、衫を著け、來て主人と爲す。

【禪海探珠要訣集】

禪戒と諸家

⑨ 古徳曰く、菩薩戒は禪門の一大事なりと、靈山、少林、嫡々相承して、諸家皆傳持す、獨り禪家の一大事たる者は、同くこれ戒なりと、雖も、其傳て禪戒たるに及で、直に毘盧の性海に入り、單に毘盧の心印を提げ、戒壇の儀則、授受の様子、高く諸家の施設する所に出づ、思議分別の能

【還山錄】

戒の語義

く及ぶ所にあらず、これ其一大事と稱する所以、宜なる哉、入室の親子にあらざるよりは、知ると能はず。

【禪戒訣】

三歸と諸戒

⑩ 尸羅とは清涼の義なり、心の熱惱を離るゝが故に、安穩の義なり、能く止觀を建立するが故に、寂滅の義なり、涅槃の樂因を得るが故に。

【菩薩資糧論】

三歸戒とは何ぞ

⑪ 佛弟子となると必ず三歸による、いづれの戒を受くるも、必ず三歸をうけて、其のち諸戒をうくるなり、しかあれ、ば、即ち三歸によりて得戒あるなり。

⑫ 其歸依三寶とは、まさに淨信を専らにして、或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後にもあれ、合掌し、低頭して

【正法眼藏】

戒法の順次

不殺生と戒

戒は入道の基

三聚淨戒と佛教

口になへていはく、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、佛は大帥なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す。
【修證義】
③ 初に三歸戒なり、次に三聚淨戒なり、次に十重禁戒なり、合て十六條戒と云ふが、祖師傳來の名題なり。
【禪戒篇】

④ 夫れ不殺は戒の首なり、戒は釋門の基なり、向に此より要たるはなし。
【幽谷餘韻】
⑤ 戒は入道の基、六道の首たり、教中の正體なり。
【黃檗清規】

⑥ 此三聚淨戒の道理は、一切佛法の根本なり、如來の一代時教、この道理の外に別に旨なし、もと三身三徳の本因

三聚淨戒の効力

三聚淨戒と佛の三徳

攝律儀戒

なれば甚深廣大の妙旨を含めり。
【說戒】

⑦ 菩薩三聚の大戒は高ふして上なく、廣ふして涯なし、所以に道ふ横に十方に互り、豎に三際を窮むと、直に四十二賢聖の法を悟り得るも、是を以て根本と爲し、三十二相、八十種好を具足するも、此戒に據る。
【明庵語錄】

⑧ 惡を止むるは菩薩の攝律儀戒にして、如來の斷徳法身の因なり、善を修するは菩薩の攝善法戒にして、如來の智徳法身の因なり、善を修するも、惡を止むるも、皆衆生の爲に回向する時は、此回向即ち菩薩の攝衆生戒にして、如來の恩徳應身の因なり。
【自受川三昧】
⑨ 第一に攝律儀戒とは、一切の惡を斷じ盡すを期とす、故に果上に至ては、佛の三身の中に清淨法身を成就し、智

攝善法戒

斷恩の三徳の中にては、此を斷徳と稱するなり。
② 第二攝善法戒とは、一切の善を積集し盡すを期とす、果上に至ては三身中の圓滿法身を成就す、三徳の中には智徳と稱す。

攝衆生戒

③ 第三攝衆生戒とは、無量の善巧方便を以て、一切衆生を度し盡すを期とす、果上に至ては、三身中の應身を成就す、三徳の中には恩徳と稱す。

不殺生戒

④ 菩薩戒は、心いれにて持つ故に心地戒と説かれたり、聲聞戒にては、喩へ親の頸に刀を打付ても命さへ切らねば殺生にはならぬなり、此辨別は、この一戒ばかりにあらず、末の九戒は同一の心地の制意なり。

不食姪戒

⑤ 經文にも、母女姉妹六親とあり、亦は一切女人不得故姪

不偷盜戒

とある故に、在家も授戒の人は一切斷姪と云ふ註釋もあれども、在家は我本妻と交合する正姪を許して、他を犯する邪姪を斷せしむるを此戒の制意とせり。
⑥ 若し今盜取りて走り出る所を押取返すは、盜人もまだ吾物とは思はず、主もまだ彼に與へじと決定せぬ故に主に罪はなし、此も五錢已上の財に限る、四錢已下は皆輕罪なり。

不妄語戒

⑦ 此戒に大妄語、小妄語と云ふとあり、乃至大妄語成すれば無間獄に墮すと、大妄語でも向への聞人が合點せず、信仰せねば重罪にはならず、故に大妄語を云ひかけて向への人の信する時に結罪するなり、此に身心妄語と云ふと經にあり、妄語は口業は定りなれども、身を舌の

身妄語

心妄語

不酤酒戒

不説過戒

代に用ゆるを身妄語と云ふ、喩へば大妄語を舌には云はねども、身の振回しを他に見せて見し人が、あの和尚は神通を得られたさうなと云ひて、蜜に供養する様なるとをせしむるを身妄語と云ふなり、心妄語とは、舌に云ふ迂詐を心に合點して居り乍ら言ふを心妄語とす、此は意業なれども、言に顯はる、故に心妄語と云ふなり、然れども皆輕罪にて、懺悔を通ず、大妄語とは、格別也、此も嬌戒と同然にて、出家沙門の上には無きとにて、在家の菩薩の上にあると故に、専ら在家に戒めらるゝなり、其結罪とは酒を向への人の手に渡して自ら價を取るときが結罪なり。

⑤ 此戒は他の過失を説くを戒めらる、先づ説く我は勿論

不讚毀自他戒

菩薩戒を受けて、同戒の出家在家の菩薩が七逆五逆亦是十重禁を犯したると云ふを見出し、聞出して、得と聞き定めもせで、二乗外道の菩薩戒を受け、又同法中ならぬ人に向て、彼人は此戒を犯せられしと、他に聞かしむるを戒めらるゝが本の制意なり。

⑥ 此戒は讚毀同時に結すとて、我徳ばかりを人に向て説く分にて、他の惡を説かざれば、此は貪ばかり故に輕罪にて、犯罪にはならず、又他の惡ばかりを説て我を褒めねば、此も瞋ばかりなれば、輕罪にて、犯罪にはならず、故に讚毀同時とは、有戒無戒を論せず、同時に我を褒て他を毀る言ばを、向への聞人が聞て信じて迂詐と思はぬ時に、此戒の結罪なり。

不慳法財戒

⑤ 此戒財は世上の寶法は出世の寶なるに、兩種を來り乞ふものを見て、法も財も慳吝して與へぬ上に、呵嘖怒るを戒めらる。是も與へぬばかりにて、呵嘖せぬは輕罪なり、與て呵嘖するも輕罪なり、與へぬ上に呵嘖を加ふるは犯重の結罪なり、財も法も與へ難き時は、向の人に對して、輕言を以て白すべし、かくすれば與へぬとても犯重犯輕共にさわりなし。

不瞋恚戒

⑥ 喩へ何程呵嘖打擲したればとて、其人が懺謝せんを受ければ、犯重に非ず、打たゝき呵嘖したる上に懺悔をも受けず、永く忿恨するは此戒の犯重なり、瞋恚は一切の功德を損する根本故に、慈悲の裏なれば、心を付て停止すべし。

不謗三寶戒

⑦ 本より外道の歸依三寶せぬは惡なれども、佛家よりかまひなし、歸依三寶の後に、隨分の菩薩戒を受て後に、ひるがへりて撥無の見を起して、三寶を蔑如するは大罪ゆゑ、犯重に攝するなり。

不殺生

⑧ 見性の力を以て、迷情を消して佛性を活せしむる、これ

不偷盜

⑨ 見性の力を以て、迷情を忘ずんば、六根清淨にして六賊

不婬欲

⑩ 起らず、これ、不偷盜戒なり。

不妄語

⑪ 見性の力を以て、迷情を照破すれば、衆生界相續せず、これ、不婬欲戒なり。

不飲酒ふおんしゅ

眞身しんくと云いはず、これ不妄語ふまうご戒かいなり。
⑤ 自性じせいを見得けんたくする時は、般若はんにゃの智明ちめい了りやうにして、無明煩惱むみやうはんなんの酒さけにをかされざる、これ不飲酒ふおんしゅなり。

【鹽山和泥合水集】

戒かい 普遍的ふへんてきの授じゆ

⑥ 小乘戒しやうじやうかいには根闕こんけつなど、て、色々の差合さしあひありて、人間にんげんなれども授戒じゆかいを許ゆるさぬ事ことあれども、菩薩戒ぼさつかいは如何いかやうの諸しよ根不具こんふぐのもの、姪男えんなん、姪女えんなん、奴婢ぬひ、八部ぶふ、鬼神くわんしん、畜生ちくじやうまでも戒師かいしの言語ごんごを聞きて、心こころに合點がつてんする程ほどの者ものには、皆授みなさうけずと云いふとなし。

【説戒】

授戒じゆかいと非人ひにん

⑦ 人ひととして戒かいを授さうからざる者は、皆第六天むだいてんの魔王まわうの眷族けんぞくなるべし。

【法燈法語】

授戒じゆかいの先後せんご

⑧ 既に聲聞戒しやうもんかいを受うく、應まさに菩薩戒ぼさつかいを受うくべし、これ入法にほほの

護戒ごかい

漸しぜんなり。
④ 寧ろ愚ぐにして守まもるべくとも、智ちにして失しつするも莫なれ、故ゆゑに護戒ごかいは、能よく其心そのこころを堅牢けんらうにして、其過そのあやまちを尅責こくせきし、其事そのことを省察せうさつして、小惡しやうあくを見ても作なすと莫なれ、小善しやうぜんを見ても作なさらずと莫なれ。
【禪戒篇】

【百丈清規】

學道がくだうの用心ようじん

④ 學道がくだうの用心ようじんは、只本執ただほんしつを放下ほうげすべし、先づ身みの威儀ゐぎをさきとしてあらたむれば、心こころも隨したがふて改あらたまるなり、先づ律りつ儀ぎ戒行かいぎやうを守まもれば、心こころも隨したがふて改あらたまるべし、宋土そうどには俗人ぞくじんの常つねの習ならひに、父母ふぼに孝養かうやうの爲ために宗廟そうびやうにて各々おのづから聚會しゆかいし、泣なまねをするほどに終つひには實じつに泣なくなり。

佛祖ぶつその行履あんり

③ 身體しんたい血肉けつにくだによくもてば、心こころも隨したがつてよくなる、と醫方いほう等とうにも見みへたり、況いはんや學道がくだうの人ひと、持戒ちかい梵行ぼんぎやうして、佛祖ぶつその行履あんり

持戒と歡喜

③ 任せて身を治むれば、心も隨て調ふなり。【毘聞記】
譬へば人あり、明鏡を執持して面を見んと期せざれども、面像自ら現するが如し、亦農夫の種を良田に散せば、芽を生せんと期せざれども、芽自ら生ずるが如し、亦燈を然し闇を滅せんと期せざれども、闇自ら滅するが如し、善男子、菩薩摩訶薩、堅く淨戒を以てば、無悔恨の心、自然に生ずると亦復是の如し、淨戒を以ての故に心に歡喜を得。

【涅槃經】

持戒は見性なり

④ 未だ見性せざる人は、情識の海に沈みて自己の心佛を殺す、これ殺生の中の大殺なり、此故に眞實の持といふは見性悟道なり。
⑤ 淨名經に云く、淨行に非ず、垢行に非ず、これ菩薩の行と、

【鹽山和泥合集】

入門と受戒

故に持犯に二邊に著せざる、是眞の持戒なり、般若經に云く、持戒の比丘、天堂に昇らず、破戒の比丘、地獄に墮せず、何を以ての故に、法界の中には持犯なきが故に。

【萬善同歸集】

⑥ 佛門に入て佛弟子となる人は、先づ三歸戒を受くべし、其仔細は、人の家に入る時、先づ門戸より入るが如く、三歸戒を受けずして、佛法門に入るとは成り難し。

【霧海指南】

持戒其一

⑦ 持戒といふは、佛性固より清淨にして、六根の主なりと雖も、六塵に染まらず、是を悟る者、自然に身心相應して、正戒の相をも取らず、邪念の心をも起さざる是なり。

【鹽山和泥合集】

懈慢と本戒
持戒其二

①心に懈慢せざる、是を本戒と名く。

【宗鏡錄】

②佛性を見、大涅槃を證せんと欲せば、必ず須く淨戒を修持すべし、若し淨戒を毀るものは、これ魔の眷屬なり、我弟子に非ず。

【涅槃經】

戒は一切の根本也

③戒はこれ一切行功徳藏の根本なり、正に佛道果に向ふ一切行の本なり、一切の佛子先づ戒に依て入り、戒に依て住し、戒に依て成辨す、禪苑清規に曰く、參禪向道は、必ず先づ受戒す、三世の諸佛皆出家受戒す、然るときんば、今日何爲ぞ高心空腹にして、戒法を稟受せざらんや、謹で參立の人に白す、此戒宜しく受持すべし。

【禪戒篇】

④夫れ戒は萬善の基たり、出づるには必ず戸に由る、若し此戒なくんば、諸善の功徳、皆生ずるを得ず。

萬善の基

福と孝と戒

【萬善同歸集】

⑤夫れ天下福を欲せば、孝を篤ふするに若かず、孝を篤ふするは戒を修むるに若かず、戒と云ふは、大聖人正勝の法なり、清淨の意を以て之を守るときは、其福諸を左右に取るが如し。

【輔教編】

⑥生死の深大海を超波するに、菩薩の淨戒船筏たり。

【佛祖正傳大戒訣】

⑦唯だ信を以て戒源と爲す。

⑧十戒三聚別の體裁なし、齊く三寶誓歸す、已に歸して欺

かすんば、即ち本有の戒心に冥す、冥心は他なし、亦た是等の人は、是等の人の冥心一切平等なり。

【禪戒篇】

戒源
戒心

生死と戒法

戒體

破戒と迷

破戒

三乗の念と破戒

乗と戒との緩急

⑤ 佛性は戒の體、戒律は佛性の用なり、體圓かなる時は、其用缺くるとなし。

⑥ 迷は破戒の根本なり。

⑦ 自心に迷へば諸戒皆破れ、見性すれば一切の戒律一時に圓持す。
【鹽山和泥合水集】

⑧ 常に大乘の善信を生じて自ら我はこれ未成の佛、諸佛はこれ已成の佛と知て、菩提心を發して念々心を去らざれ、若し一念に二乗外道の心を起さば、輕垢罪を犯さん。

⑨ 善男子、乘に於て緩なる者を名て緩と爲す、戒に於て緩なる者は名て緩と爲さず、菩薩摩訶薩この大乘に於て心懈慢せざる、是を奉戒と名く、正法を護らんが爲に、大

【梵網戒經】

乗の水を以て自ら澡浴す、是の故に破戒を現すと雖も、名て緩と爲さず。
【大般涅槃經】

第三項 禪定

禪と定との意義

① 問ふ云何なるをか禪と爲し、云何なるをか定と爲す、答ふ、妄念生ぜざるを禪と爲し、坐ながら本性を見るを定と爲す、本性とは、これ汝が無生心なり、定とは境に對して無心なれば、八風も動すと能はず、八風とは利衰毀譽稱譏苦樂是を八風と云ふ、若し是の如きの定を得ば、これ凡夫なりと雖も、即ち佛位に入らん。

【禪海探珠要訣集】

② 佛の聖智を求めんとならば、即ち禪定を要す、若し禪定なくんは、念想喧動して、其善根を壞す。
【禪門經】

禪定と聖智

坐禪と生死

端坐の外別
事なし

坐禪と公案
と自心

正印

③ 夫れ生死の大事を裁断するとは、坐禪に過たる要徑なし、所謂坐禪とは、靜なる處に蒲團一枚を安じ、其上に端身正坐して、身になすとなく、口に云ふとなく、意に善惡を圖らず、唯靜かに坐して壁に面ひ、坐して日を送る、此外に何の奇特玄妙の道理なし。【大智假名法語】

④ 生死輪廻の苦を免れんと思は、情識を盡すべし、情識を盡さんと思は、心を悟るべし、心を悟らんと思は、坐禪をすべし、坐禪は工夫を宗とすべし、工夫と云ふは、公案を深く疑ふべし、公案の根本は自心なり。【拔隊假名法語】

⑤ 大凡佛祖の兒孫必ず坐禪を一大事なりと參學すべし、これ單傳の正印なり。

要機

正門

聖凡の位を
出づ

坐のみ坐禪
に非ず

⑥ 佛々は必ず佛々を要機とせる、其要機現成せり、これ坐禪なり。

⑦ 佛法に多くの門あり、なにをもてかひとへに坐禪をすゝむるや、示して云く、これ佛法の正門なるをもてなり。【正法眼藏】

⑧ 禪定と云ふは、佛性眞常にして、動靜の諸相を離れ、宗を越え格を出で、聖凡の位に墜ちず、文字に拘らず、善惡の法量に染まざる是なり。【拔隊假名法語】

⑨ 坐禪の事坐して居るのみを坐禪とは云はず、行住坐臥共に深く公案を疑ふを眞實の坐禪と云へり、如何ほど長坐不臥にして、端正に坐すと雖も、深く疑ふ心なくんば、坐に非ず、禪に非ず、默照の邪禪なり、六祖大師の曰く、

道は心に由て悟る、豈に坐に在らんやと、此を此て知るべし、坐禪は只深く疑はしめて、自性を悟らしむる爲ばかりの方便なるを。

【澤水假名法語】

④工夫常に現前して、他念なきを禪定とす。

【快馬鞭】

②坐禪實に事業の作すべきなし、若し事業の爲すべきあらば、即ちこれ外道の法なり、我宗門中、たい自の本心を悟り、自の本性に契はんとを要す。

【佛光錄】

③夫れ佛祖正傳の坐禪は如來の自受用三昧にして、果徳圓成の身心常に安住し、ますます境界なり。

③十方三世の諸佛如來も、坐禪を常の居所とせり、此より上超す法と云ふものなき道理知りぬべし。

【自受用三昧】

坐禪と如來の三昧
坐禪と如來の居處

禪の本體

④禪何物を吾心の名なり、心何物を吾禪の體なり、乃至禪心を離れず、心禪を離れず、禪と心と異名同體なり。

【中峰廣錄】

禪と生死

⑤禪は玄學にあらず、奇解にあらず、密授にあらず、秘傳にあらず、これ衆生本有の性に於て、もとこれ諸佛所證の

三昧なり、若し契悟せんと欲せば、切に須く實胸に生死

無常の四字を以てすべし、これ萬劫未了底の最大因縁

なり、生死無常は即ち禪の骨髓、禪は生死無常の眼目を

知り、然して後、禪と生死骨髓と、眼目とを剷除して、便ち

【東語西話】

咳嚙掉臂する、これ祖師西來意なるを見るべし。

⑥所謂坐禪は習禪にはあらず、たいこれ安樂の法門なり、

安樂の法門

禪の骨目

禪とは何ぞ

思惟の二種

禪の本質

禪の本質

禪の本質

菩提を究盡するの修證なり。【不動坐禪儀】

⑦ 禪那とは、此に思惟修と云ふ故に禪思と稱す、比丘はこ

れ思を貴ぶ者なり、經に又言く、思惟の心ある者は、終に

如來の大涅槃海に入る能はずと、又言く、是法は思量

分別の能く及ぶ所に非ず、これ思を病むなり、所以は何

ぞ蓋し思に二あり、一には正思惟、一には邪思惟なり、無

思の思これ正思惟なり、有思の思これ邪思惟なり、又二

あり、一には外よりして内を思ふは、塵に背て覺に合す

る者なり、一には内よりして外を思ふは、覺に背て塵に

合する者なり、内より外を思ふは、之を思ひ之を思ふに

又重て之を思ひ、思ひ盡て源に還るなり、思に由て無思

に入る即ち念佛する者のみ念に由て無念に入るべし。

定と斷惑

慧は禪より

生ず

禪は一心の

異名

諸佛が證せし三昧

定相の五義

⑧ 定を修すれば能く惑を斷ず、餘業は能はざる所故に修

定を尊と爲す。【竹窓隨筆】

⑨ 無礙の清淨慧は、みな禪定によりて生ず。【圓覺經】

⑩ 禪は一心の異名なり、人天二乗の習ふ所、八定四禪の必

ず形を枯し、心を死せしめ、情を殞し、識を絶するの謂に

はあらず。

⑪ 所謂禪とは、玄學にあらず、奇解にあらず、密授にあらず、

秘傳にあらず、これ衆生本有の性にして、もとこれ諸佛

が證せし所の三昧なり。【東語西話】

⑫ 奢摩他をば名て能滅となす、能く一切の煩惱結を滅す

るが故に、又は能調と名く、能く諸根の惡不善の法を調

寂靜湛然

安樂の法門

ふるが故に、又は寂靜と曰ふ、能く三業をして寂靜を成せしむるが故に、又は遠離と曰ふ、能く衆生をして五欲を離れしむるが故に、又は能清と云ふ、能く貪欲、瞋恚、愚癡の三濁の法を清むるが故に、是の義を以ての故に定の相と名く。

【涅槃經】

坐禪と云ふは、閑に坐して念を静めて、寂靜湛然なるを

【坐山假名法語】

坐禪とは、もとは大安樂の法門なり、内に片縁の起る事

なく、外は萬境の嫌なし、一片にして思量を用ゐず、消然として終日を送る、此心を明め、妄想を除かんとは、非ず、鳥の空を行くが如し、轉る心なし、山の山に双べるが如し、前山後岳の思なし、これ教行證にあらず、戒定慧の

禪は難易の法に非ず

外道禪との差別

諸宗の禪と異なる點

營にあらず。

【明峰假名法語】

禪は難易にあらず、難易は各自難易するなり、即心是佛は禪門の公言なり、これ不妄語なり、これ不誑語なり、而も證せず、悟らざる時は、これ大誑語なり、これ大妄語なり。

【獨庵護法集】

凡夫外道俱に坐禪を營む、然れども凡夫外道の坐禪は佛々祖々の坐禪と同じからず、然る所以は、外道の坐禪は、邪見著味、憍慢あるが故なり、若し其解會、外道に同じければ、身心を勞すと雖も、終に益なきなり。此坐禪は、佛々の相傳祖々の直指にして、獨り嫡嗣する者なり、餘は其名を聞くと雖も、佛祖の坐禪と同じからず、所以は者何、諸宗の坐禪は、悟を待つを則と爲す、譬へ

禪の種類其

外道禪

凡夫禪

上乘禪

大乘禪

最上乘禪

如來禪

眞如三昧

ば船筏を假て大海を渡るが如し、將に謂へり、海を度て
抛つべしと、吾佛祖の坐禪は然らず、是即ち佛祖なり。

【永平家訓】

謂く異計を帯びて上を欣ひ下を厭ふて修する者はこ
れ外道の禪なり、正しく因果を信するも亦欣厭を以て
修する者は、これ凡夫の禪なり、我空偏眞の理を悟て修
する者は、これ小乗の禪なり、我法二空所顯の眞理を悟
つて修する者は、これ大乘の禪なり、若し頓に自心本來
清淨にして、もと煩惱なく、無漏の智性、本自具足、此心即
ち佛畢竟異なるをなしと悟つて、此の如く修する者は、
これ最上乘の禪なり、亦如來清淨禪と名け、亦一行三昧
と名け、亦眞如三昧と名く、これ是一切三昧の根本なり、

禪の種類其

禪の種類其

心性禪

默照禪

棒喝禪

寂滅禪

過頭禪

無禪の禪

若し能く念に修習せば、自然に百千の三昧を漸得す、達
摩の門下、展轉の相傳は、これ此禪なり。【禪源諸詮集】
禪に四種あり、愚夫所行の禪、觀察義禪、攀緣如實禪、如來
禪なり。

【楞伽經】

有時は一莖草を拈じて丈六の金身と作し、有時は丈六
の金身を將て一莖草と作し、種々に變化して一切の法
を成就す、乃至却てこれ如來禪ならず、これ祖師禪なら
ず、これ心性禪ならず、これ默照禪ならず、これ棒喝禪な
らず、これ寂滅禪ならず、これ過頭禪ならず、これ教外別
傳底の禪ならず、これ五家宗派の禪ならず、これ妙喜老
漢の杜撰底の禪ならず。

【大慧語錄】

禪は意想にあらず、意想を以て參禪すれば道に背きて

大乘と小乗

數息

功勳を絶ち、功勳を以て道を學べば則ち失す、直に須く
意想を絶却すべし、什麼を喚でか禪と作さん、脚跟下に
廓爾たり、無禪の禪之を眞禪と謂ふ。 【圓悟語錄】

○ 衲子の坐禪は、直に須く端身正坐を先と爲すべし、然し
て後に調息致心す、若しこれ小乗ならば、元と二門あり、
所謂數息と不淨となり、小乗の人は、數息を以て調息と
爲す、然れども、佛祖の辨道は、永く小乗に異る、佛祖の曰
く、白癩野干の心を發すと雖も、二乗自調の行を行する
と勿と、其二乗とは、如今世に流布する四分律宗、俱舍宗
等の宗是なり、大乘も亦調息の法あり、所謂息は長、是
息は短と知る、乃ち大乘調息の法なり、息丹田に至り、還
て丹田より出づ出入異ると雖も、俱に丹田に依て入出

一切皆禪定

疑と參禪

○ 無常曉り易く、調心得易きなり、先師天童曰く、息入り
來て丹田に至る、然りと雖も、來る處なし、所以に長なら
ず、短ならず、息丹田を出て去る、然りと雖も、去る處を得
るとなし、所以に短ならず、長ならずと、先師恁麼に道ふ、
永平に或は人ありて、和尚如何が調息せん、と問は、只
他に向て道はん、大乘に非ずと雖も、小乗に異り、小乗に
非ずと雖も、大乘に異なる、他亦畢竟如何と問ふとあらば、
他に向て道はん、出息入息非短非長と。 【永平家訓】
○ 參禪は、須くこれ疑情を起すべし、小疑は小悟、大疑は大
悟を説く。 【禪關策進】
○ 一切の法を憶せざるを名て禪定と爲す、若此言を了す
る者、行住坐臥皆是禪定なり。 【少室六門】

坐禪と深山

禪寂と悠樂

禪定と諸門

無心定

⑤ 龍樹祖師の云く、坐禪の人皆深山に住すと、須く知るべし。慣鬧を脱し、寂靜を得ると深山に如くはなし、縦ひ愚

なりとも、須く深山に居すべし、愚にして聚落に居らば、其失を増す、縦ひ賢なりとも、須く深山に居るべし、賢にして聚落に居らば、其徳を損す。

【永平廣録】

⑥ 古人跡を岩間に晦して、世と邈如たり、只専ら禪寂を以て樂と爲す、所以に孤猿月に叫べども、耳を亂すの聲を聞くとなく、幽鳥華を銜めども、眼を遮るの色なし。

【寂室録】

⑦ 禪定の入門は、唯だ宗に約して説く、諸の定の中に於て、第一と稱す、王三昧と名く、總て諸門を攝し、行原を囊括して、智海に冠戴たり、亦無心定と名く、道と相應するが

不思議定

眞如三昧法

性三昧

結跏と半跏

大尊貴生

佛祖の辨道

故に、亦不思議定と名く、情智絶對するが故に、亦眞如三昧と名く、常に傾動せざるが故に、亦法性三昧と名く、恒に變異なきが故に、諸の智光明海無量の觀行みな此より生ず。

【宗鏡錄】

⑧ 坐禪に結跏趺坐、半跏趺坐のかわりあり、結跏趺坐は佛

【霧海指南】

の坐なり、半跏趺坐は菩薩の坐なり。

【正法眼藏】

⑨ 慕然として、盡界を超越して、佛祖の屋裏に、大尊貴生なるは、結跏趺坐なり。

⑩ 佛々祖々の家風は、坐禪辨道なり、先師天童曰く、跏趺坐は、坐ち古佛の法なり、參禪は、身心脱落なり、燒香禮拜修懺、看經を要せず、祗管に打坐して、始て得んと。

【永平家訓】

坐法

④ 謂く結跏趺坐は、先づ右の足を以て左の脛の上に安じ、左の足を右の脛の上に安ず、半跏趺坐は、たゞ左の足を以て右の脛を壓すなり、寛く衣帶を繫て齊整ならしむべし、次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、兩の大拇指面へて相柱ふ、即ち正身端坐して、左に側ち、右に傾き前に躬り、後に仰ぐとを得ざれ、耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんとを要す、舌は上の脣に掛て、唇齒相著け、目は須く常に開くべし、鼻息微かに通じ、身相すでに調ふて、缺氣一息し、左右搖振して、兀々として坐定して、箇の思量底を思量せよ、不思議底如何んが思量せん、非思量これ即ち坐禪の要術なり。

【普勸坐禪儀】

坐禪工夫の方法

④ 靜上座初め玄沙に參ず、旨を得て後、天臺に居る三十餘年、山を下らず、博く三學を綜べて操行孤立す、禪者問て曰く、座の時、心念紛飛す、願くは師、示誨せよ、靜曰く、汝心念紛飛の時、當て却て紛飛の心を持つて、紛飛の處を究めよ、之を究むるに處なくんば、則ち紛飛の念、何を存せん、究心を返究すれば、即ち能究の心安ぞ在らん、又能照の智は本空なれば、所縁の境も亦寂なり、寂にして寂にあらざる者は、蓋し能寂の人なければなり、照にして照にあらざる者は、蓋し所照の境なければなり、境智俱に寂なれば、心慮安然たり、此乃ち源に還るの要道なり。

【攝捨錄】

參禪の要路

④ 參禪の要路は平生に在り。眼を開て常に須く、葛直に

坐禪の

工夫と無心

行くべし。一切有爲皆夢幻。時々【名山廣録】に觀破して情を容

④凡そ坐禪工夫は、初めより何の道理をも心に懸けずして、只佛法を明めんと思ふ志を命にして用心すべし、極め來り極め去り、佛法を明めんと思ふ心も自ら忘れはて、只身は身體ばかり立働くが如くなる時、悟らんと思ふ心もなきに、忽ちに夢の覺むるが如くなる時あるべし、此時有無生滅の諸の道理に拘はらず、別に透脱の活路あり。

⑤心を静めて坐禪すれば、何ともなき思隙なく起り、偕ては眠むるばかりなり、念の起るも、眠の來るも皆これ佛の心なり。
【月庵假名法語】

眠も佛心な

工夫と坐禪

壁に倚る勿

開眼と閉目

五十世と
師なり

日用の用心

⑥自性を見照するを工夫とし、情識を坐斷するを坐禪とす。
【鹽山和泥合水集】

⑦坐禪の時、壁及屏風、禪椅等に倚ると莫れ、若し倚れば人をして病を生せしむ、直に須く正身端坐、坐禪儀の如くにして、愼で違背すると莫れ。

⑧若し四五十年來坐禪の慣習して、渾て低頭瞌睡せざる者は、眼目を閉て坐禪するも亦妨なし、初學未だ慣熟せざる者の如きは、常に眼目を開きて坐すべし、若し坐久ふして疲勞せば、右(足)を改め、右を改むるも亦妨なし、此即ち佛より直下僅か五十世の正傳の證あるなり。
【寶慶記】

⑨凡そ坐禪するに、先哲の教審に備はれり、尋て知るべし、

其中、日用を云は、先づ、食を節量して、飽満すべからず、而も飢渴して、食念を生ずるが如きは、惡し、故に節量は、飽飢の中庸を取る、食物は、魚肉等は、云ふに及ばず、凡て五辛臭穢のものを食ふべからず、身心に害あり。

【指月法語】

坐禪の要術

調息法

入定と出定

⑤ 佛祖は始より衆生を忘れず、大悲を起し玉ふ、結跏趺坐、端身正念止觀調息は、坐禪の要術なり。

【毘盧法語】

⑥ 息を調ふとは、息の溢りもせず、滑かにもなきやうにすべし、惣して座中に息のあらく出る人は、心中に色々の念起るが故なり。

⑦ 坐に入り、始に身を按摩して、口より舊氣を吐くべし、又坐を出でんとする時も、漸々に心を放つて、身をさすり、

手足を按摩してより出づるなり。

【霧海指南】

⑧ 坐禪に十事あり、一には當に時に隨ふべし、謂く四時なり、二には安床を得る、謂く禪床なり、三には軟座毛座なり、謂く能觀なり、八には善樂なり、謂く伏意なり、九には能服なり、謂く萬物を念せざるなり、十には善助を得、謂く禪帶なり。

【三千威儀經】

參禪と坐禪の注意

⑨ 參禪は坐禪なり、坐禪は靜處に宜し、坐辱を厚く敷くべし、風煙を入らしむると莫れ、雨露をもらしむると莫れ、容身の地を護持すべし、嘗て金剛の上に坐し、盤石の上に坐する蹤跡あり、彼等皆草を厚く敷て坐せしなり、坐處明らかなるべし、晝夜暗からざれ、冬暖夏涼を其術とせり。

【正法眼藏】

禪定の功德

⑤ 若し心を攝れば、心則ち定に在り、心定に在るが故に能く世間生滅の法相を知る、是故に汝等常に當に精勤して、諸の定を修習すべし、若し定を得ん者は、心則ち散せず、譬へば水を惜めるの家は、善く提塘を治するが如し、行者も亦爾り、智慧の水の爲め故に、善く禪定を修て漏失せざらしむべし。

【遺教經】

諸行と坐禪

⑥ 諸行の中に坐禪の行最も勝れたりとす、大安樂の行なるが故に、上根上智によらず、下根下智を棄てず、只深く信する人を貴しとす。

【臨濟錄】

眞の參禪

⑦ 不斷坐禪を學ばん人は、殺害、刀杖の巷、號哭悲泣の室、相撲掉戲の場、管絃歌舞の席に入りても、安排を加へず、計較を添えず、束ねて一則の話頭と作して、一氣に進んで

退かず、譬へば阿修羅大力鬼に肘臂を捉られて、三千大千世界を遠ると千回百匝すと云へども、正念工夫、片時も打失せず、相續不斷なる、是を名て眞正參禪の衲子とす。

【遠羅天箋】

一時の佛、一生の佛

⑧ 一時坐禪すれば一時の佛なり、一日座禪すれば一日の佛なり、一生坐禪すれば一生の佛なり。

【聖一假名法語】

無益の坐

⑨ 何程坐禪しても、眠るか或は色々の事を思ひ、ぶらりと坐して坐禪するならば、本の坐禪にてはなし。

【霧海指南】

坐と如來の境界

⑩ 坐すると等しく、如來の境界に直入するが故に、無量の善根功德備りて、毫髪も欠けたるとなく、無量の惡業罪

坐禪の十利

無明と坐禪

障消え失せて微塵も餘れるものなし、實にこれ並べて云ふべきものなし。

【自受用三昧】

⑤ 宴座に住するに十の利益あり、一には其心濁らず、二には不放逸に住す、三には諸佛愛念す、四には正覺の行を信ず、五には佛智に於て疑はず、六には恩を知る、七には謗らず、八には能く防禁す、九には調伏地に到る、十には無碍智を證す。

【月登三昧經】

⑥ 五蓋の煩惱は皆無明より起る、無明は己を明めざるなり、坐禪はこれ己を明むるなり、縦ひ五蓋を斷すと雖も、未だ無明を斷せざれば、これ佛祖にあらず、若し無明を斷せんと欲せば、坐禪辨道最もこれ秘訣なり。

【坐禪用心記】

出堂法と入堂の法

經行

⑦ 出堂の威儀は並に入堂の法の如し、一息半歩は寶慶記

にあり、出定の人の歩む法なりと、又云く若し坐を起たんと欲せば、徐々として起つべし、如し床を下らんと要せば、緩々として下れ、高足大步急走馳騁するを得ざれ、又云く出入の次で、坐禪の人の腦後を見らんと莫れ、直に須らく低頭して行くべし、足を先にし、身を後にして歩むとを得ざれ、當に身足同じく運ぶべし、直に面前一尋ばかりの地を觀て行く、歩量は趺に齊し、緩々として歩す、閑靜を妙と爲す、なほ住立するが如く、運歩せざるに似たり、鞋を抱て聲を作して、大衆に無禮なるを得ざれ、行の時は應に揖手を兩袖の合裏に歛むべし、兩袖を左右の脚邊に垂るゝと莫れ。

【永平清規】

法ほふ手てをく組む方ほう

經行きんひんのほふ五ご法ぽう

其その一いつ病びよう氣きと坐ざ禪ぜん

④ 經行の時ときは、左ひだり手てを覆ふせて、大だい指しを以もつて屈くつして掌しょう中ちゆうに著つけ、餘あまの四よ指しを以もつて大だい指しを抱いだいて拳けんを作つくる、然しかして右みぎ手てを覆おほふて右みぎ手ての腕うでを抱いだく、即すなはち端たん立りつすると少すく時じし、心こころを攝せつして住じゆうせしめて即すなはち行ゆくなり。

【修禪要訣】

⑤ 經行きんひんに五ご事じあり、一いちには當まさに閑處かんじよに於おてすべし、二にには當まさに戸前こぜんに於おてすべし、三にには當まさに講堂かうどうの前まへに於おてすべし、四にには當まさに塔下とうかに於おてすべし、五にには當まさに閣下かくかに於おてすべし。

【三千威儀經】

⑥ 大だい慧み禪師ぜんじ、或ある時とき尻しりに塵物じんぶついでぬれば、醫師いし此こを見みて大だい事じの物ものなりと云いふ、慧みの云いはく、大だい事じの物ものならば死しぬべきや、醫師いし云いはく、ほとんとあやふかるべし、慧みの云いはく、若もし死しぬべくんば彌いよ坐ざ禪ぜんすべしと云いふて、猶なほ強つよく坐ざしければ、

其その二に

其その一いつ坐ざ禪ぜんと勤きん勉べん

其その塵物じんぶつうみつぶれて、別べつの事ことなかりき、古こ人じんの心こころかくの如ごとし、病やまひをうけては彌いよ坐ざ禪ぜんせしなり、今いまの人ひと、病やまひなふして坐ざ禪ぜんゆるくすべからず、病やまひは心こころに隨したがつて轉てんずるかと思おもはゆ。

⑦ 世間せけんにしやくりする人ひとに、虚言きよげんして詫わびつべき事ことと云いつげぬれば、それを詫わびしつき事ことに思おもひ、心こころに入いつて陳ちんせんとする程ほどに、忘わすれて其そのしやくり留とまりぬ、我われもそのかみ入い宋そうの時とき、船中せんちゆうにて痢病りびようせしに、惡風あくふう出來いて、船中せんちゆうさはぎける時とき、やまふ忘わすれて止とまりぬ、是これを以もつて思おもふに、學道がくどう勤勞きんらうして他事たじを忘わするれば、病やまひも起おるまじきかと覺おぼゆるなり。

⑧ 揚岐山やうぎさんの會禪師えぜんじ、はじめ住持じゆうぢの時とき、寺院じんいん舊損きゆうそんして僧そうのわづらひありし時とき、知事ちじ申まをして云いはく、修理しゆりあるべしと會あひ

其二

趙州禪師の語なり

坐禪と在家
其一

云く、堂閣破ぶれたりとも露地樹下にはまさるべし、一方破ぶれてもらば、一方のもらぬ處に居して坐禪すべし、堂宇造作によりて僧衆悟りを得べくんば、金玉を以て造るべし、悟は居所の善惡によらず、只坐禪の功の多少にあるべしと。

或時衆に示して云く、吾南方に在りしと三十年、一筋に坐禪す、汝等諸人この一段の大事を得んと思は、窮理坐禪して見るべし、三年、五年、二十年、三十年、せんに、道を得ずと云は、老僧が頭を取りて杓に作りて、小便をくむべし、斯の如く誓ひける、眞に坐禪辯道は、佛道の直路なり。

問て云く、出來人は諸縁速かに離れて坐禪辯道に碍な

其二

し、在俗の繁務はいかにして一向に修行して、無爲の佛道にかなはん、示して云く、凡そ佛祖あはれみの餘り、廣大の慈門を開きおけり、これ一切衆生を證入せしめんがためなり、人天誰か入らざらん、此を以て今昔を尋ぬるに、その證これ多し、しばらく代宗順宗の帝位にして、萬機いと繁かりしが、坐禪辯道して佛祖の大道を會通す、李相國、防相國ともに補佐の臣位にはんべりて、一天の股肱たりし、坐禪辯道して佛祖の大道に證入す、只これ志の有無によるべし、身の在家出家にはかゝはらじ。

大宋國には、今の代の國王、大臣、士俗、男女、共に心を祖道にと、いめずと云ふとなし、武門文家、いづれも參禪學道を志させり、志す者必ず心地を開明すると多し、これ世

坐禪の利害

③ 務の佛法を妨げざる自ら知られたり。【正法眼藏】
坐禪は能くすれば四百四病を治し、悪しくすれば病を起すと天臺の止觀にも見へたり。【霧海指南】

第四項 智慧

智慧の能力 其一

① 實に智慧は則ちこれ老病死海を度る堅牢の船なり、亦これ無明黑暗の大明燈なり、一切病者の良藥なり、煩惱の樹を伐るの利斧なり、是故に汝等當に聞思修の慧を以て、自ら増益すべし。若し智慧の照あれば、これ肉眼と雖もこれ明見の人なり。【遺教經】

其二

② 千人門を排んよりは、一人の關を抜かんには如かず。【大光明藏】

心性と智慧

③ 心の性は本淨し、諸の過を垢と爲す、智慧の水を以て心

智慧佛性

の垢を洗除せよ。【文珠師利問經】
④ 智慧と云ふは佛性ひとり明かにして、萬機を輝し、遍く聖凡の眼となると、日月の世界を照すが如くにして、古に亘り、今に亘りて、邊際なき眞の淨光是なり。【拔隊假名法語】

世智と出世間の智

⑤ 智に二あり、世間智あり、出世間智あり、世智に又二あり、一に博學宏辭、長枝遠略にして、但だ多智多解を以て人に勝る者是なり、二に善惡を明にし、邪正を別ち、其當に行ふべき所を行ひ、其當に止むべき所を止むる者是なり、僅かに其初を得ば、是を狂智と謂ふ。
⑥ 戒定慧の三學、布施等の六波羅密、たゞ智慧最も重し、輕んずべからず、唯智慧最も先にす、後にすべからず、惟智

狂智 三學六度と智慧

慧は一切の法門を貫徹す等ふすべからず、經に云く、戒に因て定を生じ、定に因て慧を發すと、蓋し其生發の次第を語る時は、則ち然り而して重んずる所を知り、先とする所を知り、貫徹する所を知て始て得べし、然りと雖も、又聰明才辨の謂にあらず、前世の智の如きは、當に悟中に説くべし。

⑦ 一智の箭に駕して、衆魔の軍を破り、一慧の刀を揮ふて、群疑の綱を斬る。 【宗鏡錄】

⑧ 禪を耽味して、慧を發せざるを癡禪と曰ふ。 【禪門寶訓音義】

⑨ 禪なければ智ならず、智なければ禪あらず、然れば則ち禪は智の照さざるには非ず、照は智として成せざるに

智慧と魔軍
禪と智其一
其二

其三
寂と照

其四

大智と大愚

はあらず、大哉禪智の業務めざるべけんや。 【禪要序】
⑩ 夫れ三業の興る禪智を以て宗と爲す、禪にして智にあらざれば、以て其寂を窮むるとなく、智にして禪にあらざれば、以て其照を深ふるとなし、則ち禪智の要、照寂の謂、それ相濟なり、照寂を離れず、寂照を離れず、感ずるときんば、則ち俱に逝き、應ずるときんば、必ず同く趣く、功立用に在つて、交々萬法を養ふ。 【禪修行方便經】
⑪ 世間一切の心を修する所の人、禪那を假らざれば、智慧あるとなし。 【首楞嚴經】

⑬ 大智は愚の如く、大曉は昧の如し、若し智を以て智を爲す時は、乾慧に侵さるゝ所と爲る、若し曉を以て曉となす時は、聰明に崇らるゝ所となる。 【正山廣錄】

虚明自照

凡聖皆除く

みを用ゐず。明月光中に雲影度るも。到頭雲月兩つ
ながら情なし。【禪餘内集】

⑥ 自己の光明明かに照すを虚明自照と云ひ、情識の思量
分別を加へざるを不勞心力と云ふなり、心力を勞すれ
ば、光明即ち情識の暗昧となり、心力を勞せざれば、暗昧
即ち光明の自照となる道理なり、珠の光を發して、光返
りて自を照すと同じ。【自受用三昧】

⑦ 等閑に行く處。歩々皆如なり。聲色に居ると雖も。
寧ろ有無に滞らんや。一心異なると靡れば。萬法殊
に非ず。體用を分つとを休めよ。精麤を擇ぶと莫れ。
機に臨で礙へず。物に應じて拘ると無し。是非の情
盡き。凡聖皆除かる。誰か得誰か失す、何れか親何

大悟の妙用

悟りても行
道せよ

悟道の概況

れか踈なる。頭を拈して尾と作し。實を指して虚と
爲す。身を魔界に翻へし。脚を邪塗に轉ず。了に逆
順に非ず。【大慧武庫】

⑧ 悟達の人は、寂滅性中に安住して、恒沙の妙用を起し、世
間の幻想に隨順して、顛倒の衆生を利濟す、虚妄轉變を
以て其懷を擾さず、蓋しそれ國土の安危、自佗の逆順み
な吾家の戯具たるのみ。【夢窓語録】

⑨ 學道の人たとひ悟を得ても、今は至極と思ふて、行道を
やむるとなかれ、道は無窮なり、悟りても猶行道すべし。
【隨記聞】

⑩ 真正辨道の上士、密參功積り、純工力充る時は、平生の心
意識情總て行れず、癡々凱々として、理盡き詞窮つて、參

智と鍊心

③ 智者は智を以て心を鍊り、諸垢を尋窮するになほ鑛鐵の如し、數々入つて百鍊する時は、則ち精全となる、なほ大海の如し、日夜沸動する時は、則ち大寶となる、人も亦是の如し。

【禪關策進】

悟の意義

第五節 悟道

① 悟と云ふは一心を明らむるとなり、明らむるとは、自心の明らかになりたるとなり。

實悟

② 實悟は迷悟の兩頭を萬里に離れ、生滅苦樂の二頭を萬々里に離れたり。

妄想の滅亡

③ 山岳深き處に一の岩窟あり、人跡不到にして、此岩窟甚だ暗し、二人の男あり、此處に到る、一人の男箒を以て岩窟の中の暗物を拂ひ除かんとして、力を竭せども、暗物

小悟と大悟

更に除かず、いよく力を竭して、日々拂ふと雖も、更につくると能はず、彼一人の男、火をともして岩窟の中に入る、右の暗物忽ち打失せて明なると晝の如し、火を燃して入ると、暗き物はずくるとも見え、忽ち失せたり、人々一心を悟るとも、又々此の如し、一心を悟る時は、妄想分別の打失すると、岩窟に火を燃して入ると、暗物忽ちつき果つるが如し。

【澤水假名法語】

無事昇平

④ 得力に大小ありて、小悟却て大悟の妨となる、小悟を捨て、取らざれば、大悟必ず得、小悟を取りて捨てざれば、大悟必ず捨る、譬へば、人の小利を貪れば、大利を得ざるが如し。

【快馬鞭】

⑤ 林間事無ふして、久しく昇平なり。彼我渾て忘れて、親

虚明自照

凡聖皆除

みを用ゐず。 明月光中に雲影度るも。 到頭雲月兩つ

ながら情なし。 【禪餘内集】

⑥ 自己の光明明かに照すを虚明自照と云ひ情識の思量
分別を加へざるを不勞心力と云ふなり、心力を勞すれ
ば光明即ち情識の暗昧となり、心力を勞せざれば暗昧
即ち光明の自照となる道理なり、珠の光を發して光返
りて自を照すと同じ。 【自受用三昧】

⑦ 等閑に行く處。 歩々皆如なり。 聲色に居ると雖も。
寧ろ有無に滞らんや。 一心異なると靡れば。 萬法殊
に非ず。 體用を分つとを休めよ。 精麤を擇ぶと莫れ。
機に臨で礙へず。 物に應じて拘ると無し。 是非の情
盡き。 凡聖皆除かる。 誰か得誰か失す、何れか親何

大悟の妙用

悟りても行道せよ

悟道の概況

れか疎なる。 頭を拈して尾と作し。 實を指して虚と
爲す。 身を魔界に翻へし。 脚を邪塗に轉ず。 了に逆
順に非ず。 【大慧武庫】

⑧ 悟達の人、寂滅性中に安住して、恒沙の妙用を起し、世
間の幻想に隨順して、顛倒の衆生を利濟す、虚妄轉變を
以て其懷を擾さず、蓋しそれ國土の安危、自佗の逆順、
な吾家の戯具たるのみ。 【夢窓語錄】

⑨ 學道の人、たとひ悟を得ても、今は至極と思ふて、行道を
やむるとなかれ、道は無窮なり、悟りても猶行道すべし。
【隨記聞】

⑩ 眞正辨道の上士、密參功積り、純工力充る時は、平生の心
意識情總て行れず、癡々凱々として、理盡き詞窮つて、參

窮底の心に和して、一時に打失して、氣息も亦將に絶へんとす。是れ即ち大道現前の時なり。學者宜しく精彩を著くべし。是時に當て一念の異解を生ずると莫れ、一念の退意を生ずると莫れ、身心を放捨して、一も求むる所なく、猛に本參の話頭に提持して、他の現境に一任す。二乗の見現せば、二乗の見に一任し、外道の見現せば、外道の見に一任す。是真ならずと知て、又敢て怖れず、全身墜して飽迄其源を盡す。切に忌む心を起して取捨するを、只要す。中に於て一回放身捨命せんとを、時節到來すれば、忽然として、落節して、此消息を知る。是を峻崖に手を撒じて絶後に再び蘇ると謂ふ。忽ち一念子の間に於る根源を識得して、自性、他性、衆生性、佛性、乃至穢土、淨

悟は思議すべからず

悟界

土、一見に見徹して、毫芒を留めず、大事を了畢し、生死を透脱せば、豈快ならざらんや。【宗門無盡燈論】
 ② 所謂悟は大にして、容易に領覽すべきにあらず、思量分別の能く解する所にあらず、聰明利智の曉了する所にあらず、魔嬈を認て大悟と爲し、病患を執して功德となす。あに錯ならざらんや、兄弟眞に須く審細に參學して、魔を治め、病を療すべし。【禪關策進】
 ③ 我今滔々として自然なり。公王卿宰を羨まず、四時なほ金剛の如し、苦樂の心常に改めず、法寶をば須彌に喩へ。智慧は江海よりも廣し、八風の爲に牽かれず、又精進も懈怠もなし、性に任せて浮沈して、顛するが如し、散誕として、縦横自在なり、遮莫あれ、刀劍の頭に臨むとを、我自

無生死

無念と大悟

悟と男女

【禪海探珠要訣集】

③ 有を離れ、無を離れ、戒を以て心地となす、男にあらす、女にあらす、善を以て莊嚴となす、既に有無を離れ、男女を越ゆ、其間に生滅ありやまたなしや、生は大地と共に來り、死は虚空と同じく去る、所以に道ふ、生とも道はじ、死とも道はじと、甚としてか恚麼なる、從來生死相か、はらず、而今什麼の處に向てか去る。

【義雲語錄】

④ 念なければ生死なし、心なければ種々の法起るとなし、此心源を知るを見解とも悟道とも生死を出離すると、も、解脱とも世尊とも、如來とも云ふなり。

⑤ 男女によらず、貴賤を撰ばず、只身を捨て、この大事を勤むべき志だにあらば、悟を得るとは、掌を返すが如く

別事なし

貧富快樂と大悟

【法燈法語】

⑥ 永劫生死の業海を躍倒し、無明常夜の暗窟を撥轉して、歡喜踏舞を忘るゝ者の累日點檢し、看來れば、一點の所得なし、舊に依て、眼は横に鼻は直なり。

【槐安國語】

⑦ 貧者は財なきを憂て、富人の樂たるを慕ふ、而れども富人は富人の憂あるを知らず、賤者は官なきを憂て、貴人の樂たるを慕ふ、而れども、貴人は貴人の憂あるを知らず、貧者は貧者の憂あるを知らず、富者は富者の憂あるを知らず、貧富各々其足らざる所を憂へ、天下に王たるを慕ふ者は、以て人世の樂を窮むと爲す、而れども天下に王たる者は、天下に王たるの憂あるを知らず、而してなほ其憂の特に甚しきとを知らず、而してなほ其反て群臣百姓の樂たるとを知らず、嗚呼、悉く妄な

り、たゞ智人能く兩ながら憂樂無ふして無憂樂に住する者も亦妄なり、大悟大徹にあらざれば、自由の分なし。

【竹窓隨筆】

④ 證と悟とは二事のみ生死の心絶ゆるは悟なり、絶て後に再び甦るは證なり、維摩經に受を滅せずして證を取るとはこれ此證なり。

【大光明藏】

⑤ 物々心上に到る。心全ければ物自ら閑なり。古今城郭の裏、得る者に住して山の如し。

【法眼語錄】

⑥ 至近にして見るべからざる者は眉目なり、至親にして知るべからざる者は心性なり、眉目は見るべからずと雖も鏡に臨む時は則ち之を見る、心性は固とに知るべからず、徹悟する時は則ち之を知る、苟も徹悟にあらず

徹悟と見性
物自ら閑なり

證と悟の別

悉く本來の人の

無事閑散

して、心性の蘊奥を知らんと欲せば、これ鏡を離れて眉目を見んと欲するが如し。

【東語西話】

② 涅槃の大宅に歸りて法海を統べ、以て家と爲さば、更に此界他方なく、誰か客郷流寓を分たん、竹松引畔常に本地の風光を露はし、百草頭邊全く脚跟の大事を彰はす、直に得たり、月の秋水に臨むが如く、在處に光輝し、雁の長空を過るに似て、影沈で迹なし、所以に云ふ、處處真處々真にして、塵々盡くこれ本來のひと。

【法海具觀】

③ 利を競ひ名に奔る何ぞ誇るに足らん。清閑獨り許す野僧が家。心田長せず、無明の草。覺范長へに開く智慧の華。黄土坡邊蕨笋多し。青苔地上に塵沙少なり。

【三續集】

天眼通

天耳通

他心通

宿命通

飛行自在通

③ 眼にあつて色を見れども、諸の色惑を蒙らず、これ天眼通なり。
④ 佛性天真にして耳に應じてこゑを聞きて響の當頭に分別歴々として、分別の相にあづからず、これ天耳通なり。

⑤ 自ら心性を明むるとき、三世の諸佛歴代の祖師乃至人天群生の心性を一時に識得する、これ他心通なり。

⑥ 自性を悟る時即今の自心空劫以前より盡未來際にとほり、歴々孤明にして、生滅去來の相を離れて通達して疑惑なき、これ宿命通なり。

⑦ 自性を明むるとき、無明の巢窟を照破し、本地の風光發生して、一刹那の間に十方にとほりて、青松の中に留ら

漏盡通

見性成佛

ず、これ自性眞實の飛行自在通なり。

⑧ 自性を明むる時、煩惱を轉して菩提となす、菩提は元の自性なれば、迷悟の二境を越えて、聖凡の間に居せず、諸相を離れて染汚する處なき、これ漏盡通なり。

⑨ 昔人ありて酒を飲むに、酒の中に蛇あるを見ながら、之を飲む、則ち家に歸りて腹の中に苦痛限りなし、種々の療治を加ふれども、しるしなくして命おはらんとす、亭主是をきいて此人を我もとへ喚びよせて、先の座にお

きて酒を興へて、是を藥なりと云ふ、此人飲まんとするに酒の中の蛇、さきの如し、亭主に之を告ぐ、亭主座の上を指す、此人見上て見れば、上に弓を掛けたり、其時さきの蛇は、此弓の影なりとしりて、二人目を見合せて笑つ

見性けんせいと輪廻りんね

て言葉なし、苦痛忽ちに止みて、則ち本の如し、見性成佛も亦かくの如し。
【抜隊假名法語】
◎自己おのれに眞妄しんまうあり、識神しきしんを妄まうとし、佛性ぶつせいを眞しんとす、眞性しんせいを悟さとる時は輪廻りんね生死しやうじの根源こんげんを截斷さいだんし、本有ほんゆうの衆德しゆとく現成げんじやうして、ものを接せうし、生せいを利りす、是これを見性けんせい成佛じやうぶつとす。

【鹽山和泥合水集】

本心ほんしん

◎佛ほとけと云いふも、悟さとると云いふも、名なは變かはれども、同じ道みちなり、我わが本心ほんしんを悟さとる人ひとを則すなはち佛ほとけと名なくるなり。

物見えず

◎眼まなこを開ひらかざれば萬物ばんぶつ見えず、悟さとらざれば佛性ぶつせい現あらはれず。

生ながら身なし

◎悟さとりは念ねんを滅却めつじやくするを云いふ、念ねんを以もつて身みをなす、悟さとれば生せいきながら身みなし。

見性けんせい

◎自性じせい本もとより佛ほとけなり、更さらに佛ほとけを求もとむべからず、自性じせいに生死しやうじ

不悟者ふごしやも大悟だいごす

なし、又また生死しやうじを厭いとふべからず、此かくの如ごとく佛ほとけを求もとめず、生死しやうじをも厭いとはざる時とき、自性じせい本もとより現あらはれて百千ひやくせんの日月じつげつよりも明あきらかなり、是こゝに於おいて少すこし心を注そぎて明あきらめ取とるもあり、之これを見性けんせいと名なく。
【大燈法語】

◎證契さとりは、迷者めいしやの始はじめて大悟だいごするをのみ證契さとりと云いふと、參學さんがくすべからず、迷者めいしやも大悟だいごし、悟者ごしやも大悟だいごし、不悟者ふごしやも大悟だいごし、不迷者ふめいしやも大悟だいごし、證契者さとりしやも證契さとりす。

無師獨悟むしどくご

◎佛ほとけの印證いんしやうを得うる時とき、無師獨悟むしどくごするなり。

大悟と却迷だいごきやくめい

◎大悟だいごは認賊にんぞく爲賊ぞくなるべし、却迷きやくめいは認子にんし爲子こなるべし。

佛と衆生のほとけしゆじやう大悟だいご

◎諸佛しよぶつの大悟だいごは衆生しゆじやうの爲ために大悟だいごす、衆生しゆじやうの大悟だいごは諸佛しよぶつの大悟だいごを大悟だいごす。

迷と悟其まよひご一いつ

◎自己じこをはこびて萬法まんぽうを修證しゆしやうするを迷まよひとす、萬法まんぽうすゝみ

坐禪とさと

て自己を修證するはさととなり。問て云く、この坐禪の行は未だ佛法を證會せざらんも

證上の修

のほ坐禪辨道して其證を取るべし、既に佛正法を明め得ん人は坐禪何の待ところかあらん、示して云く、癡人の前には夢を説かず、山子の手には舟掉を與へ難しと雖も、更に訓を垂るべし、夫れ修證は一にあらずと思へる、即ちこれ外道の見なり、佛法には修證これ一等なり、今も證上の修なる故に、初心の辨道即ち本證の全體なり、かるが故に修行の用心を授くるにも、修の外に證を待つ思ひなかれと教ゆ。【正法眼藏】

解脱の諸義

解脱を名て知足と曰ふ、解脱を名て一味と云ふ、又は清淨と云ふ、又は除却と云ふ、又は寂靜と云ふ、又は無上と

屋宅なり

無波濤

無作の樂

云ふ、又は最上と云ふ、又は廣大と云ふ、又は無愛と云ふ、又は到彼岸と云ふ。(取意)

解脱をば名て屋宅と爲す、例へば人あり曠野を行くに險難あるが如し、解脱は爾らず、險難あるとなし。

解脱をば名て無波濤と名く、彼の大海の其水波濤あるが如し、解脱は爾らず。

解脱は無作の樂と名く、無作の樂は貪欲瞋恚愚痴を吐くが故に、喩へば人あり誤て蛇の毒を飲で毒を除かんが爲の故に、即ち吐藥を服するが如し、既に吐くを得て、毒即ち除きて、身安樂を得るが如し、解脱も亦爾なり、煩惱諸結の縛毒を吐て、身安樂を得るを無作の樂と名く。

【宗鏡錄】

解脱其一

⑤ 自ら覺り他を覺らしめて、覺智明了なるを則ち解脱と名く、故に知る、一切の諸善は覺を以て根と爲すとを、其覺に因て遂に能く顯現す、諸の功德の樹、涅槃の果、此に因て成す。

解脱其二

⑥ 夫修道の者身滅すれば道成す、亦甲の析て樹の生ずるが如し、此業報の身は念々無常にして、一定の法無し、但念々に隨て之を修して今生死を厭ふとを得ず、亦生死を愛ふとを得ず、但念々の中、俱に妄想せざる時は、生じては有餘涅槃を證し、死しては無生法忍に入る、眼色を見る時、色に染まず、耳聲を聞く時、聲に染まず、皆解脱なり、眼、色に著せざれば、眼を禪門と爲す、耳、聲に著せざれば、耳を禪門と爲す、總て之を言はば、色の性をみる者は

解脱と見性

常に解脱し、色の相を見る者は、常に繫縛す、煩惱に繫縛せられざる者を即ち解脱と名く。【少室六門】

⑦ 大勇猛の心を奮發し、明了に佛性を見徹して、普く性中の差別の法門を窮て、掌上を見るが如く、而して後に、向上の些子を提持し、法窟の爪牙を獲得して、無礙自在に一切を度脱し、生々世々菩薩の行を行じて、衆生を盡さずんば、終に退心なき、是を一佛乘と謂ひ、又は實大乘と謂ふ、又は根本最上乘一切智乘と謂ひ、是を究竟眞實解脱と名け、是を菩薩摩訶薩と名く、豈は大丈夫兒の能事に

正覺

⑧ 迷ふ時は、人法を逐ひ、解る時は、法人を逐ふ、解る時は、識色を攝し、迷ふ時は、色識を攝す、但有心にして、分別計較

【宗門無盡燈論】

無我と解脱

する自心の現量は、悉く皆是夢なり、若識心寂滅にして、
一も動念の處なくんば、是を正覺と名く。

問ふ、世間の人種々學問す、云何してぞ得道せざる、答ふ
己を見るに由が故に得道せざるなり、己と云は我なり、
至人は苦に逢ても憂へず、樂に遇ても喜ばず、己を見ざ
るに由が故なり、苦樂を知らざる所以は、己を亡するに
由が故なり、虚無に至るを得れば、己自尙ほ亡す、更に
何物ありてか亡せざる、乃至若無我ならば、物に逢にも
是非を生せず、是とは我自らは是とす、物の是なるに非ざ
るなり、非とは我自ら非とす、物の非なるに非ざるなり、
即心無心なる是を佛道に通達すと爲す、物に即して見
を起さざる名て達道と爲す、物に逢て直に達して其本

迷と悟其二

源を知る、此人慧眼開く、智者は物に任て己に任せず、即
ち取捨違順なし、愚者は己に任て物に任せず、即ち取捨
違順あり。

心こころを將もちて法ほふを學まなぶ時ときは、則すなはち心しん法ほふ俱ともに迷まよひ、心こころを將もちて法ほふ
を學まなばざれば、則すなはち心しん法ほふ俱ともに悟さとる、凡おほそ迷まよと云いふは、悟さとりに迷まよ
ふなり、悟さとりと云いふは、迷まよを悟さとるなり、正見しやうけんの人ひとは、心こころは空くうにし
て無むなりと知して、即すなはち迷悟めいごを超こゆ、迷悟めいごあると無なきを始はじめて
正解しやうげ正見しやうけんと名なく。

罪惡と迷悟

迷まよふ時ときは、罪つみあり、解とる時ときは、罪つみなし、何を以もつての故ゆゑに、罪性ざいせう
空くうなるが故ゆゑに、迷まよふ時ときは、罪無つみなし、罪つみを見みる、若もし解とる時ときは、罪つみ
に即すして、罪無つみなし、何を以もつての故ゆゑに、罪處つみじよ所ところなきが故ゆゑに、經きやう
に云いく、諸法しよほふは無む法ほふなり、眞用しんよう疑ぎふと莫なれ、疑ぎへば即すなはち罪つみ

病薬と迷悟

と成る何を以ての故に、罪は疑惑に因て生ずればなり、若此解を作す者は、前世の罪業即ち焉消滅す、迷ふ時は六識五陰皆煩惱生死の法なり、若悟る時は六識五陰皆是涅槃無生死の法なり。【少室六門】

⑤ 大凡醫の術たる病あるに因て薬を用ゆるとあり、病若し除く時は、薬も亦用ゆるとなし、病除て薬存する時は、薬却て病と成る、是故に病に死せずして薬に死する者も亦在り、法も亦是の如し、迷あるに因て悟を要するとあり、迷若し除く時は、悟も又要するとなし、迷除て悟存する時は、悟却て迷と成る、是故に迷に死せずして悟に死する者も亦あり、病に死し迷に死する者の如きは、猶救ふべきに似たり、薬に死し悟に死する者の如きは、之

離縛と解脱

を如何ともするとなし。【毘山廣録】
④ 諸の苦縛を離るゝを、解脱と爲と名く、是人何に於てか而も解脱を得た、虚妄を離るゝを解脱を爲と名く。【法華經】

禪なく道なし

③ 我居近しと雖も、我居遠し。終歲誰人か此間に到らん。茅屋禪なく又道なし。七轉八倒も也間々。【獨庵護法集】

解脱と如来

② 夫れ涅槃とは、名て解脱と爲す、乃至眞の解脱とは、名て一切の繫縛を遠離するを曰ふ、又解脱とは、名て虚無と曰ふ、眞の解脱とは、不生不滅なり、是故に解脱は即ち如来なり。【涅槃經】

山はこれ山

① 若し見得透せば、舊に依て天はこれ天、地はこれ地、山は

悟上の修

其の疑惑と大悟
其一

【碧巖種電鈔】

◎ これ山、水はこれ水なり。
◎ 悟れる上にも、尙あるべきやうに行ひをなし候へば、油のともし火を助けて光を増すが如し。 【廿三問答】

◎ 參禪は須くこれ疑情を起すべし、小疑は小悟、大疑に大悟と説く、この事は、たゞ當人的功心あらんとを要す、纔に功心あれば、眞疑便ち起る、疑來り疑去りて、疑はざれども自ら疑ふ、朝より暮に至て、粘頭綴尾、打成一片、撼せざれども亦動かさず、走れども亦去らず、昭々靈々、常に現在前す、これ便ちこれ得力の時なり、更に須く其正念を確め、慎で二心なかるべし、行を行ふとを知らず、坐して坐するとを知らず、寒熱飢渴、悉くみな知らざるに至る、此境界現前すれば、即ちこれ家に到るの消息なり。

其二

修と悟

眞の修證

◎ たゞ堅く正念を凝して、悟を以て則とせよ、此時に當て八萬四千の魔軍あり、汝が六根門頭に在て、伺候して、一切の奇異善惡等の事、汝が心に隨ふ、汝もし瞥に毫釐の着心を起さば、便ち他の圈續に墮て、他に主と作られて、他の指揮を受けて、口に魔話を説き、身に魔事を行はし、般若の正因、茲より永く絶へ、菩提の種子また芽を生せじ、たゞ心を起すと莫れ、箇の屍を守る鬼子の如く、守り來り守り去て、疑團子歟、然として爆地一聲せば、天を驚かし、地を動かすを管取せん。 【天目語錄】

◎ 參せずして自ら悟る、上古はこれあり、自餘は未だ力參に從はずして悟を得る者あらず。 【空谷語錄】
◎ 只管打坐、之を眞修と謂ひ、身心脱落、之を眞證と謂ふ。

【毘山廣錄】

第六章 佛陀

第一節 序

佛の意義

○佛とは覺と名く、既に自ら覺悟し、復能く他を覺せしむ、善男子譬へば人あり、賊ありと覺知すれば、賊能く爲すとなきが如し、菩薩摩訶薩能く一切無量の煩惱を覺り、既に覺了し已て、諸の煩惱をして、能く爲す所なからしむ、是故に佛と名く、是の覺を以ての故に、生せず、老せず、病せず、死せず、是故に佛と名く。

【涅槃經】

解脱と如來

○解脱は即ちこれ如來なり、是故に如來は清淨無垢なり。

【宗鏡錄】

生死の二念なきを佛と云ふ

○たとへば人形を種々の物を集めて作り出して、あやつりたるは、生れたるが如し、あやつりたる糸きれて倒るれば、死すると見るが如し、實には、生れも死にもせず、生るとても來るものなく、死するとても去るものなし、土も火も風も法界の氣なれば、とりわけて主なし、法も法界の心なれば、主なし、萬執着の心なく、二念をつかざるを佛と申すなり。

【廿三問答】

佛陀如來

○或時は如來藏といひ、或時は須彌東王佛といひ、或時は香積如來といひ、或時は阿彌陀といひ、或時は藥師といひ、乃至普賢、文殊、觀音、地藏と名けて説くところ、みな只一心を指す語なり。

【鹽山和泥合水集】

心佛

○我が心本來清淨なると、青天白日の一點の曇なきが如

し、森羅萬像一切の有情無情は、皆これ此の光の轉變なり、凡て實體あるとなし、是を悟るを佛と云ひ、是に迷ふを衆生と云ふなり、迷悟は安心の分別なり。

【月庵假名法語】

⑥ 各々我等が只今、何の了簡もなく、箇様にして、打向ひ居る當體、みな悉く佛なり、畢竟佛とは、何を云ふぞとなれば、妄念惡念なく、安心の胸中さつぱりとしたる所が佛なり。

【大道假名法語】

⑦ 佛を名て能仁寂默と爲し、一切智人と爲し、大勇猛者と爲し、眞實語者と爲す。

⑧ 夫れ佛々祖々、一切の言教に當體の説あり、應縁の説あり、二説隱顯時に隨て互に宣ふ、若し一時一説に泥まば、

さつぱりしたる佛

佛の異名

佛が教法の二面

則ち佛祖の本旨に違背する者多し、水自ら冷に、火自ら熱しと云ふは、當體の説にして、水冷かならず、火熱からずと言ふ時は、即ち應縁の説なり。

【正山廣錄】

⑨ 佛の體はもと無爲なり、迷情によりて妄に分別す、法身は、虚空に等し、未だ曾て生滅あらず、縁あれば佛出世し、縁なければ佛入滅す、處々に衆生を化するとなほ、水中の月の如し、常にあらず、亦斷にあらず、生にあらず、亦滅にあらず、生も未だ曾て生せず、滅も亦未だ曾て滅せず、無心の處を了見すれば、自然に法の説くべきなけん。

⑩ 帝云く、何をか佛心と爲す、師云く、佛とは、天竺の語、唐言には覺と曰ふ、謂く人智慧ありと覺照するを佛心と爲す、心と云ふは、佛の別名なり、百千の異號あれども、體は

佛の本體

佛心

佛と道其一

其二

これその一なり、本より形状なく、青黄赤白男女等の相に
 ならず、天に在て天に在らず、人に在て人に在らず、而
 も天に現じ、人に現ず、男を能くし、女を能くす、始にあら
 ず、終にあらず、生なく滅なし、故に靈覺の性と號す、陛下
 の日に萬機に應ずるが如き、即ちこれ陛下の佛心なり、
 假使千佛共に傳ふとも、別に所得ありと念はざれ。
 ② 馬祖道一禪師僧問ふ、如何なるか、これ佛師云く、即心是
 佛、云く如何なるか、これ道師云く、無心これ道、云く佛と
 道と相去ると多少ぞ、師云く、佛は手を展るが如く、道は
 拳を握るに似たり。
 ③ 佛は天地の如く、道は元氣の如し、佛の徒は萬物なり、佛
 なく天地なくんば、道と元氣と孰れが眞宰とならん、萬

物なく、徒なくとも、亦何ぞ夫の道と元氣とを傷まんや。

【禪林類聚】

佛の境界

佛の方便

佛の言語
其一

如來の室と
衣と座

③ 諸佛の境界は思議すべからず、一切衆生、佛の境を思量
 すれば、心則ち狂亂せん。
 ④ 虚妄の説は、即ちこれ罪過なり、如來は悉く一切の罪過
 を斷つ、云何ぞ虚妄あるべきや、如來は虚妄の言なしと
 雖も、若し衆生虚妄の説に因りて法利を得と知れば、宜
 しきに隨て方便して爲に之を説く。
 ⑤ 我終に世間と共に諍はず、何を以ての故に、世智有と説
 けば、我も亦有と説き、世智無と説けば、我も亦無と説く。
 ⑥ 如來の室とは、一切衆生の中の大慈悲心、これなり、如來

【涅槃經】

の衣とは、柔和忍辱の心これなり、如來の座とは、一切の法空これなり。

佛の壽命

⑤ 世尊は大力ましく、て、壽命量るべからず。【法華經】

佛の言語其

⑥ 如來はこれ眞語者なり、實語者なり、如語者なり、不誑語

二

なり、不異語者なり。【金剛經】

佛の世界

⑦ 諸佛の世界はなほ空華の亂起亂滅するが如し、即せず

離せず、縛なく、脱なく、始て知る衆生本來成佛なることを、生死涅槃なほ昨夢の如し、善男子、昨夢の如くなるが故に、當に知るべし、生死と及涅槃と、起なく滅なし、來なく、去なし、其證する所の者、得なく失なく、取なく捨なし、其能く證する者も、作なく止なく、住なく滅なく、此の證の中に於て、能なく所なく、畢竟して證もなく亦證する者

如來の説法

もなし、一切の法性平等にして不壞なり。【圓覺經】

⑧ 日出で、光等しく下中上の衆生を照す、如來も世間を照して、愚の爲に眞實を説き玉ふ、一切都て無生なり、亦因縁滅にあらず、彼の生滅の中に於て、而も因縁の想を起す。【楞伽經】

佛恩

⑨ 汝今先づ寂滅を取るべからず、縦ひ無學を得たりとも願を留て彼の末法の中に入て、大悲慈を起し、正心深信の衆生を救度して、魔に著せずして、正知見を得せしめよ、我今汝を度して、已に生死を出しつ、汝佛語に遵はんを佛恩を報すと名くべし。【首楞嚴經】

世尊の意義

⑩ 譬へば人王に大力士あり、其力千に當て、更に餘の之を降伏する者あるとなし、故に此の士を稱して、一人當千

一 佛と生死其

と云ふが如し、是の如くの力士、王に愛念せられ、徧く爵祿を賜り、封賞自然なり、當千の人と稱するを得る所以は、是人未だ必ず力千に敵せざれども、但種々の技藝の所能、よく千に勝るを以ての故に、當千と稱す、如來も亦爾なり、煩惱魔、陰魔、天魔、死魔を降し玉ふ、是の故に、如來を三界の尊と名く、如來の正法は不可思議なり、是故に如來は定でこれ有爲、定でこれ無爲なりと、宣説すべからず。

【涅槃經】

◎この生死は即ち佛の御いのちなり、此をいとひ捨てんとすれば、即ち佛の御いのちを失なはんとするなり、これにとまりて、生死に着すれば、これも佛の御いのちを失なふなり、佛のありさまをといひむるなり、厭ふとな

二 佛と生死其
佛は自心なり

佛と本性

く、したふとなき、この時始めて佛の心に入る。

◎大聖は生死を心にまかす、生死を身にまかす、生死を道にまかす、生死を生死にまかす。

【正法眼藏】

◎佛は是自心なり、錯て禮拜すると莫れ、佛は是西國の語、此土には覺性と云ふ、覺とは靈覺なり、機に應じ、物に接し、眉を揚げ、目を瞬き、手を運び、足を動かす、皆是自己靈覺の性なり、性は即ち是心なり、心は即ち是佛なり、佛は即ち道なり、道は即ち禪なり、禪の一字、凡聖の測る所に非ず、直に本性を見る、之を名て禪と爲す、若本性を見ずんば、只是凡夫なり、是佛法に非ず。

◎至道は幽深なり、話會すべからず、典教、何に憑てか及ぶ所あらん、但本性を見れば、一字だも識ずして、亦見性する

佛と心

とを得ん、即ち是佛の聖體は本來清淨にして雜穢ある
と無し、所有言説は皆是聖人の心より起すの用に於て、
用の體は本來空なり、名言尙及ばず、十二部經、何に憑て
加及ぶとを得ん。 【少室六門】

⑤ 我本心を求て心自ら持す。心を求て心知を待とを得
ざれ。佛性は心外より得ず。心生ずるは便ち是罪生
の時なり。我本心を求て佛を求めず。三界は空にし
て無物なりと了知す。若佛を求んと欲せば但心を求

めよ。只這の心心心是佛なり。
世人よ、自が色身はこれ城なり、眼耳鼻舌はこれ門なり、
外に五つの門あり、内に意門あり、心はこれ地、性はこれ
王、王は心地の上に居る、性あれば王あり、性去らば王な

其二

し、性は身心にありて存ず、性去れば身心壞す、佛は性中
に向て作る、身外に向て求むると莫れ、自性迷へば即ち
これ衆生、自性覺れば即ちこれ佛、慈悲は即ちこれ觀音、
喜捨は名て勢至と爲す、能淨は即ち釋迦なり、平直は即
ち彌陀なり、人我はこれ須彌なり、貪欲はこれ海水なり、
煩惱はこれ波浪なり、毒害はこれ惡龍なり、虛妄はこれ
鬼神なり、塵勞はこれ魚鼈なり、貪瞋はこれ地獄なり、恐
痴はこれ畜生なり、善知識よ、常に十善を行せば、天堂便
ち到り、人我を除けば、須彌倒れ、貪欲を去れば、海水竭き、
煩惱なく、波浪滅し、毒害除き、魚龍絶え、自が心地上に、大
光明を放ちて、外は六門を照し、清淨にして能く六欲の
諸天を破し、自性の内照は三毒即ち除き、地獄等の罪一

佛性と衆生性

時に消滅して内外明徹西方に異ならず此修を作さずんば如何ぞ彼(淨土)に到らんや。【六祖壇經】

問ふ佛性と衆生相と同と爲すか別と爲すか師云く性に同異なし若し三乗教に約すれば即佛性あり衆生性ありと説きて遂に三乗の因果あり同異なるなり若し佛乘及祖師の相傳に約すれば即ち是の如きを説かず唯一心あつて同に非ず異にあらず因にあらず果にあらず所以にたゞこれ一乘道無二亦無三と云ふなり。【宛陵錄】

其二

◎本を了すれば心を識り心を識れば佛を見るこれ心これ佛これ佛これ心なり念々佛心にして佛心佛を念す早く成せんとを得んと欲せば心を戒めて自ら律にせ

迷へば衆生悟れば佛

人々天真佛

麻三斤

よ淨律淨心なれば心即佛なり。【傳大師心王銘】

◎衆生本より以來佛性を見ずと雖も日に用て知らず釋迦老子成道の端的活眼を開て之を觀れば則ち草木國土悉皆成佛なり六祖曰く悟れば則ち衆生これ佛迷へば則ち佛これ衆生佛もと隔なし迷ふが故に衆生と爲り悟るが故に佛と爲る衆生若し迷なくんば佛と何ぞ別たん故に四十九年の説法も迷の衆生を度して本有の佛性を見せしむるのみ。【十種疑問奏答】

◎自心を識得すれば萬慮灰す修あり證あるは眼中の埃人々悉くこれ天真佛此事分たざれば材も材ならず。【獨庵護法集】

◎洞山因に僧問ふ如何なるかこれ佛師云く麻三斤

古佛心其一

佛心

諸佛

佛境界

古佛心其二

佛國土其一

【洞山語錄】

古佛心は、牆壁瓦礫なり。

知るべし、佛心と云ふは、佛の眼睛なり、破木杓なり、諸法

なり、三界なるが故に、山海國土日月星辰なり。

迷を大悟するは諸佛なり。

凡そ諸佛の境界は不可思議なり、心識の及ぶべきにあ

らず、況んや不信劣智の知るを得んや、だゞ正信の大

機のみ能く知るを得るなり。

華嚴慧達僧あり、問ふ、如何なるか、是古佛心師曰く山河

大地。

一切の國土は、これ佛國土なり、一切の法は、これ佛法な

【宗鏡錄】

其二

其三

佛陀の行狀

其一

其二

所謂世界は十方みな佛世界なり、非佛世界未だあらざるなり。

【正法眼藏】

この世界は、本より清淨本然の淨土なり。

【鐵眼假名法語】

佛言く、善男子、如來の所有の一切の善行は、悉く諸の衆

生を調伏せんが爲の故なり、譬へば醫王の如し、有する

所の醫方は、悉く一切の病苦を療治せんが爲なり。

【宗鏡錄】

石の白きを見て石の堅きを見ず、手は之が堅きとを知

りて、其白きとを知らず、真人の行李佛魔も辨ずると能はず、蕩々たるかな。

【槐安國語】

第二節 佛陀の智慧

平等無二

自心と佛智

不思議智

大醫王の如

不動の智慧

① 如來の智は平等無二にして、分別あるとなし、たゞ衆生の心行異なるに隨ふが故に所得の智慧各々同ふせず。

② 若し自心を了すれば、頓に佛慧を成ず。 【宗鏡錄】

③ 諸佛の智慧は、甚深無量なり、其智慧の門は解し難く、入り難し、一切の聲聞辟支佛の知ること能はざるところなり。

【法華經】

④ 昔し我佛敎を設くると一術に止るに非ず、大醫王の徧く群病を療じて、方を處すると各々異なるが如し、佛智量り難し、神化測るとなしと曰ふと雖も、亦た、これ時に因り、機に因て其急なる所のものを見て、之を先にするのみ。

【鼓山晚錄】

⑤ 文珠當に知るべし、一切諸の如來は、本の因地より、皆智

佛の智覺

増減なし

佛の十大智

慧を以て覺して、無明を了達す、彼空華の如しと知りぬれば、即ち能く流轉を免る、又夢中の人の醒るとき得べからざるが如し、覺する者は虚空の如し、平等にして動轉せず。

【圓覺經】

⑥ 人法の無我を覺し、二障を了知し、二種の死を離れ、二煩惱を斷ず、是を佛の智覺と名く。

⑦ 如來の智慧は、衆生を成熟すれども増さず減せず、身法にあらざるが故に、身法は壞なり、如來の法身は、これ身法にあらす。

【楞伽經】

⑧ 佛は一には衆生ありて、專心に憶念せば、則ち其前に現はれ玉ふ、二には衆生ありて、心調順なれば、則ち爲に法を説き給ふ、三には衆生ありて、能く淨信を生せば、必ず

無碍智

無量の善根を獲せしめ給ふ、四には衆生ありて、能く法位に入れば、悉く現證し了知せしめ玉ふ、五には衆生を教化して、疲厭し玉ふとなし、六には諸の佛刹に遊び玉うて、往來無礙なり、七には大悲なるが故に、一切衆生を捨て玉はず、八には變化の身を現じて、恆に斷絶せしめ玉はず、九には神通自在にして、未だ曾て休息し玉はず、十には法界に安住して、能く觀察し玉ふ。

⑩ 佛子、如來の智慧も亦復是の如し、無量無礙にして、普く能く一切衆生を利益し、具足して衆生の身中に在り、但諸の凡愚は妄想執着して知らず、覺らず、利益するを得ず、爾時に如來無障礙清淨の智眼を以て、普く法界の一切衆生を觀じて、而も是の言を作さく。

人間の智と佛智

⑤ 奇なる哉、奇なる哉、此諸の衆生云何ぞ如來の智慧を具するに、愚癡迷惑して不知不見なる、我當に教るに、聖道を以て其をして、永く妄想執着を離れ、自ら身中に於て、如來廣大の智慧と佛と異なること無きを見るところを得せしむべしと、即ち彼の衆生をして、聖道を修習せしめて、妄想を離れしむ、妄想を離れ已て、如來無量の智慧を證得して、一切衆生を利益し安樂ならしむ。【華嚴經】

第三節 佛陀の慈悲

① 佛は増上縁なるを以て、廣大の悲願善根力あり、衆生はこれ等流果なるを以ての故に、志誠の感ずる所根熟して見る、然も總て自心を出でず。

② 火は物をこがす、水は物を活す、火は物をこがすと其火

自ら慈悲を知らず 佛と衆生